



囲遺跡調査地遠景写真



掲載番号 51 (SE12 出土管玉、左：欠損部を下にして撮影、右：欠損部上にして撮影)

宮崎市文化財調査報告書 第130集

かこい 遺 せき
田 遺 跡

民間開発(宅地造成工事)に伴う埋蔵文化財調査報告書



2020

宮崎市教育委員会



田遺跡 垂直写真

宮崎市文化財調査報告書 第130集

囲 遺 跡

民間開発(宅地造成工事)に伴う埋蔵文化財調査報告書



2 0 2 0

宮 崎 市 教 育 委 員 会

序

本書は平成28年度に行われた囲遺跡の発掘調査報告書です。

囲遺跡は宮崎市佐土原町下那珂にあり、今回の発掘調査の結果、弥生時代から江戸時代までの様々な遺構や遺物が検出され、本遺跡が長い間に多くの人びとによって営まれていたことがわかりました。

特に弥生時代の溝状遺構から出土した管玉は、宮崎県内においてこの時代の最も古い装身具であることが判明しました。その他にも室町時代の建物跡や溝状遺構等も見つかって、本地域において空白であった中世の歴史に新しい1ページを刻むことができました。

これらの重要な成果をまとめた本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習などにも活用され、埋蔵文化財保護の理解につながれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施に関しまして理解とご協力を賜りました事業者の皆様及び地元の方々々に心から感謝し御礼申し上げます。

令和2年3月

宮崎市教育委員会

教育長 西田 幸一郎

例 言

1. 本書は民間開発（宅地造成工事）に伴って行われた宮崎市佐土原町下那珂に所在する囲遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本業務は民間事業者から依頼を受けて平成28年度から実施している。発掘調査は平成28年度で終了し、平成29年度から令和元年度にかけて整理作業が行われた。
3. 調査組織は以下のとおりである。

調査主体：宮崎市教育委員会

平成28年度（発掘調査）

文化財課	課長	日高貞幸	
総括	文化財係長	井田 篤	
調整担当	主査	金丸武司	
庶務担当	主事	武富知子	
調査担当	主査	秋成雅博	
	主査	時任直也	
	嘱託	大嶋昭海	（現公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター）

平成29年度（整理作業）

文化財課	課長	羽木本光男
総括	副主幹兼埋蔵文化財係長	井田 篤
調整担当	主査	金丸武司
庶務担当	主事	杉尾 悠
整理担当	主査	秋成雅博
	嘱託	沼口常子

平成30年度・令和元年度（整理作業）

文化財課	課長	富永英典
総括	主幹兼埋蔵文化財係長	井田 篤
調整担当	主査	稲岡洋道
庶務担当	主事	杉尾 悠(H30)
	主事	高田真帆(R1)
整理担当	主査	秋成雅博
	嘱託	沼口常子

4. 遺構の実測は秋成・大嶋・金丸が主体となって行い、一部を（有）ジバングサーベイに委託した。
5. 遺物実測は生目の杜遊古館にて秋成・沼口・市川勇樹（文化財課技師）・菊地ひろみ・今井直緒・古田矩美子（以上3名文化財課嘱託）及び整理作業員が主体となって行った。なお一部の遺物実測及びトレースを㈱イビソク宮崎営業所に委託した。
6. 遺構の写真撮影は秋成・大嶋が行い、空中写真については㈱スカイサーベイに委託した。また遺物の写真撮影は秋成が行った。
7. 本書で使用する北は真北である。
8. 本書で使用する遺構の略記号は以下の通りである。

SA：堅穴住居跡 SB：掘立柱建物跡 SC：土坑 SE：溝状遺構 SX：不明遺構

9. 本書で使用する図面は以下の縮尺で掲載している。
竪穴住居跡 (S=1/60) 土坑 (S=1/30)
溝状遺構 (S=1/100:平面図、S=1/20:断面図、SE5のみS=1/40・1/50)
土器・陶磁器・土製品・石鍋 (S=1/3) 石塔 (S=1/8)
石器 (S=2/3:剥片石器・火打石、S=1/2:石錘・礫石器、S=1/1:管玉)
10. 遺構の報告については基本的に時代ごとにおこなっているが、本調査では遺構の切り合い関係が多かったため、他の時代の章で報告をしているものもある。
11. 本書の執筆は第1章第1・2節及び第2章第1節を金丸が、そのほかを秋成が行った。編集は秋成が行った。
12. 出土遺物及び掲載図面・写真は宮崎市教育委員会が保管している。資料の閲覧・利用に関しては、事前に宮崎市教育委員会までお問い合わせいただきたい。
13. 本発掘調査にかかる文書手続きは以下のとおりである。
- | | |
|--------------------|---------------------------|
| 工事通知 (文化財保護法第93条) | 平成28年6月21日 宮教文第330号1 (進達) |
| | 平成28年6月24日 宮教文第330号3 (伝達) |
| 発掘調査期間 | 平成28年10月18日から平成29年2月10日 |
| 着手報告 (文化財保護法第99条) | 平成28年10月27日 宮教文第609号3 |
| 発見通知 (文化財保護法第100条) | 平成29年2月13日 宮教文第609号4 |
| 終了報告 | 平成29年2月13日 宮教文第609号5 |
| 保管証 | 平成29年2月23日 宮教文第609号7 |
- ※一連の手続きは旧遺跡名「開跡」で行っている。本書の作成に当たっては詳細分布調査の結果を受けて遺跡名を「開遺跡」に変更している。

なお、本書の刊行に当たって以下の方にご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

(敬称略 順不同)

谷口武範・堀田孝博 (宮崎県立西都原考古博物館)

赤崎広志・日高広人 (宮崎県埋蔵文化財センター)

稗田智美 (株式会社イビソク)

目 次

本文目次

第Ⅰ章 遺跡周辺の環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1
第3節 地名「開」について	4
第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過	4
第1節 調査に至る経緯	4
第2節 調査の概要	5
第Ⅲ章 弥生時代の調査	8
第Ⅳ章 古墳時代・古代の調査	19
第1節 古墳時代の調査	19
第2節 古代の調査	23
第Ⅴ章 中世・近世の調査	28
第Ⅵ章 まとめ	44

挿図目次

第1図 遺跡分布図 (S=1/15000)	2
第2図 遺跡周辺地形図 (S=1/6000)	3
第3図 囲遺跡全体遺構配置図 (S=1/300)	6~7
第4図 弥生時代主要遺構配置図 (S=1/400)	9
第5図 弥生時代竪穴住居跡実測図 (S=1/60)	10
第6図 弥生時代土坑 (S=1/30) 及び 出土遺物 (S=1/3) 実測図①	11
第7図 弥生時代土坑 (S=1/30) 及び 出土遺物 (S=1/3・2/3) 実測図②	12
第8図 弥生時代土坑 (S=1/30) 及び 出土遺物 (S=1/3・2/3) 実測図③	13
第9図 弥生時代溝状遺構 (S=1/100・1/20) 及び出土遺物 (S=1/3・1/2) 実測図①	14
第10図 SE12 出土遺物実測図① (S=1/3・2/3)	15
第11図 SE12 出土遺物実測図② (S=1/1・2/3)	16
第12図 弥生時代溝状遺構 (S=1/100・1/20) 及び出土遺物 (S=1/3) 実測図②	17
第13図 弥生時代柱穴出土遺物実測図 (S=1/3・1/2)	18
第14図 古墳・古代主要遺構配置図 (S=1/400)	20
第15図 古墳時代竪穴住居跡 (S=1/60) 及び 出土遺物 (S=1/3) 実測図	21

第16図	古墳時代堅穴住居跡 (S=1/60)・土坑 (S=1/30) 及び出土遺物 (S=1/3) 実測図……………22
第17図	古墳時代土坑実測図 (S=1/30) ……23
第18図	古代土坑 (S=1/30)・溝状遺構 (S=1/100・1/20) 及び出土遺物 (S=1/3・2/3) 実測図……………24
第19図	古墳時代～古代不明遺構 (S=1/60) 及び出土遺物 (S=1/3) 実測図 ……25
第20図	SX9 出土遺物実測図 (S=1/3・2/3・1/2) ……26
第21図	古代柱穴出土遺物実測図 (S=1/3) ……27
第22図	中世・近世・時期不明主要遺構配置図 (S=1/400) ……29
第23図	中世掘立柱建物平面図 (S=1/100) 及び出土遺物 (S=1/3) 実測図 ……30
第24図	中世土坑 (S=1/30) 及び出土遺物 (S=1/3) 実測図① ……31
第25図	中世土坑 (S=1/30) 及び出土遺物 (S=1/3) 実測図② ……32
第26図	中世土坑 (S=1/30) 及び出土遺物 (S=1/3) 実測図③ ……33
第27図	中世～近世溝状遺構 (S=1/100・1/20) 及び出土遺物 (S=1/3) 実測図 ……34
第28図	中世溝状遺構実測図 (S=1/100・1/50・1/40) ……35
第29図	SE5 出土遺物実測図① (S=1/3) ……36
第30図	SE5 出土遺物実測図② (S=1/3・1/2) ……37
第31図	SE5・SE11 出土遺物実測図 (S=1/3・2/3・1/2) ……38
第32図	中世溝状遺構 (S=1/100・1/20) 及び出土遺物 (S=1/3) 実測図① ……38

第33図	中世溝状遺構 (S=1/100・1/20) 及び出土遺物 (S=1/3) 実測図② ……39
第34図	近世溝状遺構 (S=1/100・1/20) 及び出土遺物 (S=1/3) 実測図 ……40
第35図	中世柱穴出土遺物実測図① (S=1/3) ……41
第36図	中世柱穴出土遺物実測図② (S=1/3・2/3・1/2) ……42
第37図	時期不明遺構実測図 (S=1/30:土坑、S=1/100・1/20:溝状遺構) ……43
第38図	表採遺物実測図 (S=2/3・1/2・1/8) ……43

表目次

第1表	出土土器観察表①……………45
第2表	出土土器観察表②……………46
第3表	出土土器観察表③……………47
第4表	出土土器観察表④……………48
第5表	出土陶磁器・石製品観察表……………49
第6表	出土石器観察表……………50

写真図版

図版1	囲遺跡遺構①……………51
図版2	囲遺跡遺構②……………52
図版3	囲遺跡遺構③……………53
図版4	囲遺跡遺構④……………54
図版5	囲遺跡遺構⑤……………55
図版6	囲遺跡遺構⑥……………56
図版7	囲遺跡遺構⑦……………57
図版8	囲遺跡出土遺物①……………58
図版9	囲遺跡出土遺物②……………59
図版10	囲遺跡出土遺物③……………60
図版11	囲遺跡出土遺物④……………61

第 I 章 遺跡周辺の環境

第 1 節 地理的環境

宮崎県東部の東側、日向灘沿岸に位置する宮崎平野は、陸地の隆起により海岸線が後退しながら形成された海岸平野である。沿岸部には、日向灘に平行する浜堤（砂丘）の連なりを見ることができる。

石崎川は周辺の丘陵から流れる小河川が合流しながら平野内を蛇行する。囲遺跡はこの川がΩ字状に湾曲する部分に位置し、江戸時代にはここを「瓢箪島」と呼んだとの記録もある。

第 2 節 歴史的環境

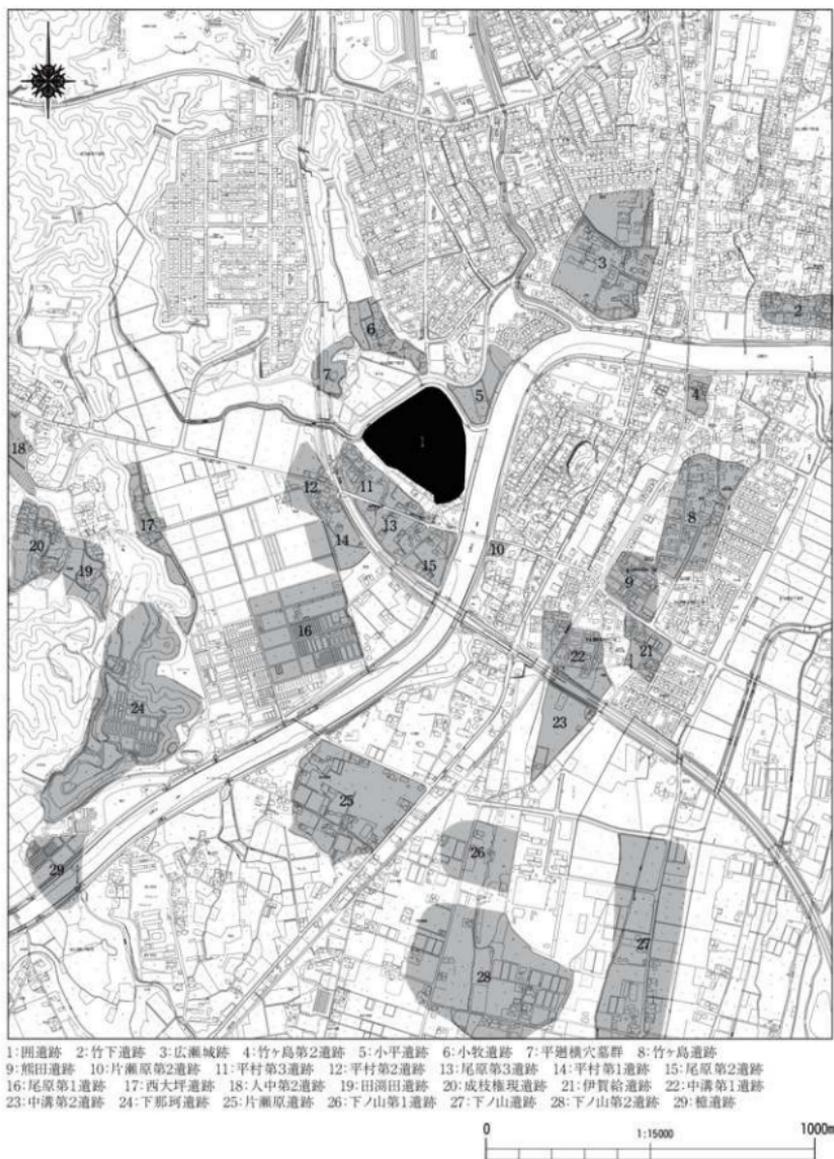
石崎川左岸の丘陵末端部に立地する下那珂遺跡は、旧石器時代のナイフ形石器文化期や細石刃文化期、縄文時代早期の押型土器や炉穴が確認されたほか、弥生時代後期から終末期は堅穴建物で 120 軒検出され、記号や絵画が線刻された土器や瀬戸内・畿内系の土器、大量の石包丁、爬龍文鏡（破鏡）が出土した。これらの成果から、稲作による生業が確立し他地域と交流を持つ、宮崎平野の弥生時代を代表する大規模な集落遺跡と位置づけられている。また下那珂遺跡西側の丘陵上にある下那珂貝塚は、貝層と共に「飛鳥」の線刻が行われた弥生時代の壺が採集された。なお弥生時代としては、下那珂丘陵南部の独立丘陵上にある堤下遺跡からも多量の甕の出土が確認されている。なおこのほかにも弥生時代の遺跡としては、「中溝式土器」の標識遺跡となった中溝第 2 遺跡が本遺跡の南東部に位置している。

古墳時代は、宮崎県総合農業試験場周辺に広瀬村古墳群が分布する。吾平神社（平小牧稲荷神社）内にある 46 号墳は低地に作られた周堤を伴う前方後円墳である。このほか試験場の丘陵上や麓の低地に円墳が 15 基、丘陵斜面に横穴墓が 42 基分布する。このほか、下那珂の丘陵上にある下那珂馬場古墳は前方後円墳であり、甲冑などの鉄器が副葬されている。光陽台団地東側では土器田横穴墓が発見され、東 1 号は玄室の壁に三角文や魚、馬などの線刻が行われている。このように広瀬地区には多くの特色ある墳墓が分布するが、古墳時代の集落は不明である。

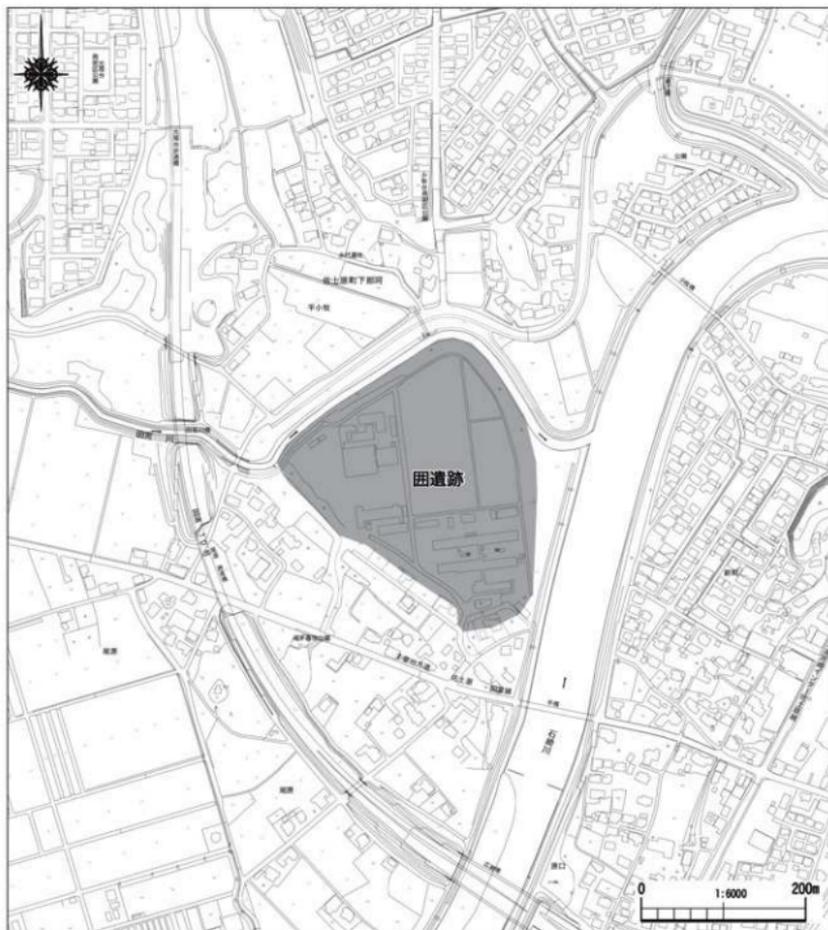
古代は近年調査された片瀬原第 2 遺跡で 7 世紀後半から 8 世紀にかけての堅穴住居跡が多く検出されている。また片瀬原遺跡ではそれに後出する 9 世紀の堅穴住居跡が確認されている。

中世は上田島にある佐土原城に城下町が形成されるため、広瀬地区に関しては文献が殆ど残されておらず、発掘調査でも目ぼしい成果はない。広瀬地区ではないが、下那珂の丘陵西部は「諏訪城（那珂城）」と呼ばれる群郭式の山城が築かれ、中世日向を支配した伊東氏の定めた「伊東四十八盟」に名を連ねている。諏訪城は伊東氏逃亡後に島津氏が支配するが、関ヶ原の戦いに伴って伊東氏の攻撃を受け落城している。なお諏訪城の周辺には江戸幕府が始まると広瀬地区は佐土原藩の一部となった。

近世における広瀬地区の記録も乏しいが、稲作については下田島が用水路を作り安政の検地前後で収益が上がり、石高が二割増しになる上がったものの、広瀬では全く変わらぬ状況であった。なお囲遺跡の北側に隣接する小牧遺跡は、発掘調査で近世陶磁器が出土している。



第1図 遺跡分布図 (S = 15000)



第2図 遺跡周辺地形図 (S = 1/6000)

幕末に起きた戊辰戦争に加わり、戦後恩賞として加禄が倍増した佐土原藩は、明治二年広瀬小学校・広瀬中学校を含む一帯に広瀬城の築城決定。資材輸送のために一ツ瀬川と石崎川を運河で繋ぎ、旧藩主以下佐土原城下に住む士族、商人の多くが移転する一大事業を開始した。城下には武士の居住域を定め、町人街（栄町）、荷揚屋・歓楽街（稲荷町）、学校、砲兵練習場等を設けた。築城までの旧藩主が住む屋敷は開遺跡の南東にある砂丘上に建てられた。砂丘の麓は今も「御殿下」と言う地名が残される。移転に当たって士族に多大な出費を強いたが、明治四年の廃藩置県により築城は中止となり、旧藩主は華族として東京に移住。佐土原原も消滅した。

明治十年、西郷隆盛を推し立てた不平士族の反乱は西南戦争と呼ばれ、佐土原からも400名が参加したと伝えられる。不平士族は田原坂の戦いで政府軍に敗れた後宮崎に転進。広瀬も占拠された。その際開遺跡（瓢箪島）では、不平士族の戦費や生活費を捻出するために「西郷札」と呼ばれる紙幣が印刷されたと伝えられる。換金の当てもない紙札と商取引を強いられたことにより、広瀬は戦場となった以上に疲弊し、戦後没落する商人が続出した。

西南戦争後、広瀬に住む旧士族の出資により砂地を利用してサツマイモを栽培、収穫されたサツマイモは製糖工場にて砂糖が作られた。数年後に桑の育成が促進され、養蚕業や製糸工場が営まれるようになった。糸は福島港を介して大阪に出荷され、広瀬地区はようやく活況を呈すようになった。今日、この砂丘ではビニールハウスによる促成栽培が行われている。

以上のように、開遺跡の立地する広瀬地区は、弥生時代より多くの遺跡が分布するものの、中世以降は不明な点が多い地域であった。

第3節 地名「圃」について

「圃」（かこい）という地名は、南九州における城郭関連地名として認識されており、「圃居」や「圃」の字を当てることもあるようである。この地名は城や城の一部を意味することがあったようだが、開遺跡のあるこの場所については城や館に関わる伝承や歴史は全く不明である。また調査前の現状についても既に養蚕試験場の敷地となっており、城郭遺構を見つけることはできなかった。以上のことからこの場所「圃」という地名については川に囲まれた低地という地形がその由来になっている可能性が考えられる。

【引用・参考文献】

吉本章弘 2005 「城館用語に見る戦国期の島津領国-「圃」を事例として-」 『南九州城郭研究』 第3号 南九州城郭談話会
佐土原町教育委員会 2005 「佐土原町の中・近世城館」

第2章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

開遺跡の東部には宮崎県の養蚕試験場があり、北に桑畑、南に試験場の建物があった。桑畑は県有地の売却に伴い、平成25年9・10月に確認調査が行われ、地表面下70cmより中・近世に相当する柱穴等を、地表面下130cmから弥生時代の遺構を検出した。

養蚕試験場も、同様の理由から平成27年8月26日、建物の間で確認調査を実施した。その結果、対象地の北部から中部では、地表面下20cm～40cmで弥生時代の溝、中世の小穴、近世の溝と共に、土器や陶磁器が出土した。一方南部は地形が大きく落ち込んでおり、埋蔵文化財は検出されなかった。

養蚕試験場の敷地は民間に売却後、宅地分譲を目的とした造成工事が計画されていたため、市文化財課はその民間事業者と協議を行った。その結果、造成後の分譲地に建設される個人住宅は、個別に事業主体者と文化財課の間で埋蔵文化財の取扱いについて協議する必要がある

が、今回の造成工事は埋蔵文化財に影響はない。ただし分譲地に建設予定の道路は恒久施設に当たることから、道路のうち確認調査で埋蔵文化財が確認された北部から中部について、民間事業者からの受託事業として発掘調査を実施することとなった。

なお、発掘調査は平成28年10月18日から平成29年2月10日にかけて実施した。

第2節 調査の概要

前述の通り、調査地はもともと宮崎県の養蚕試験場であり、平坦な地形を呈していた。

発掘調査範囲は住宅地内の道路部分を対象となり、東西方向に約88m～83m、南北方向に約6mの長方形プランの調査区が南北方向に2つ並び（南側調査区及び北側調査区）、それらを結ぶように東西方向に3m、南北方向に36mの長方形プランの調査区（中央調査区）が設定された。真上から見ると調査区全体の形はアルファベットの「H」の形を呈している。なお、今回の発掘調査面積は約1483㎡である。

調査はバックホーによる表土の剥ぎ取りから始まった。表土は20cm～40cmの堆積が確認され、表土下は遺構検出層である黄褐色粘土層がすぐに露出する状況で、遺物包含層は残存していなかった。このような状況から調査地はもともとの地形を大きく改変されている状況と考えられる。検出された遺構の深さが数cm程度のものが多かったこともそのことを裏付けている。また調査地は多くの攪乱を受けており、特に南側の調査区は遺構がほとんど残存していなかった。今回設定された南側と北側調査区の東端では本遺跡の東側にある石崎川に向かって傾斜する地形が検出され、さらに湧水も見られた。

遺構検出層は粘土層であり、水を含むと軟らかいが滑りやすく、乾燥すると非常に硬質となるという掘削作業には適していないような環境であった。さらに雨天後は調査区内に水が溜まってしまい、発掘作業ができない日も多かった。また検出された遺構の埋土も地山と同じ様な土質のものが多く、注意深く掘削作業を行っても混入している遺物がバラバラに破損してしまうこともあるような遺物の残存環境が良くない状況でもあった。

発掘調査は工事の工程上南側調査区から行うこととなり、南側については調査終了とともに工事に着工した。その工事と平行して中央調査区と北側調査区の調査を行った。

今回の調査の主な遺構としては南側調査区では弥生時代と古代、中世の溝状遺構を各一条ずつと古墳時代の土坑1基を検出した。そのうち弥生時代と中世の溝状遺構については北側調査区まで延びている状況が確認された。

北側調査区及び中央調査区では弥生時代の堅穴住居跡3棟、土坑16基、溝状遺構7条、古墳時代の堅穴住居跡3棟、土坑10基、古代の土坑1基、古墳時代～古代の不明遺構1基、中世の掘立柱建物跡4棟、土坑13基、溝状遺構6条、近世の溝状遺構4条を検出した。なお、これらの他に柱穴は2,000基以上検出している。北側調査区の遺構密度は非常に濃く、遺構同士の切り合い関係のないものはほとんど見られなかった。

検出された遺構の図化作業については株式会社 CUBIC の遺構実測支援システム「遺構くん」を使用した。また報告に当たって遺構の断面図の作成はこのシステムを使用して行っている。



第3图 因遗址全体遺構配置図 (S=1/300)



第三章 弥生時代の調査（第5図～第13図）

弥生時代の遺構は竪穴住居跡3棟、土坑16基、溝状遺構7条、柱穴多数が検出された。なお、柱穴は建物等並ぶものは確認できなかったため、出土遺物のみ第13図に掲載している。

竪穴住居跡（SA61・83・79）、それらと切り合い関係にある土坑（SC53・80・103）

SA61はSE46と切り合い関係にあり、北側が調査区外に延びている。検出面から床面までの深さは数cm程度であった。確認できた範囲では東西方向に2.1m、南北方向に2.82m + aの不整形プランを想定させる。床面からは調査区境界付近に地床炉が検出された。その他に本遺構に伴うものかは不明だが、南側に長楕円形の掘り込みが2基検出された。なお、主柱穴は検出されなかった。遺構埋土からは弥生土器片が出土したが、図化には耐えなかった。

SA83は古墳時代のSA64に切られており、SE65とも切り合い関係にあるが、こちらは新旧関係が不明である。また南側は調査区外に延びている。その他にも多数の柱穴と切り合い関係が見られた。検出面から床面までの深さは数cm程度であった。確認できた範囲では東西方向に3.81m + a、南北方向に1.77m + aの不整形プランが想定される。前述のとおり多数の柱穴と重なっており、その中に本遺構の主柱穴が存在する可能性はある。その他に北側中央部に不整形な段が確認された。遺構埋土からは弥生土器片が出土したが、図化には耐えなかった。

SA79は東側がSC53・80・103と切り合い関係にある。土層観察からこの3基の土坑に切られていることがわかった。またこれらは全て北側が調査区外に延びている。この他に南側部分が柱穴6基とSE50と切り合い関係にある。検出面から床面までの深さは数cmであった。確認できた範囲では東西方向に1.2m + a、南北方向に2.33m + aの不整形プランを想定させる。床面からは明確に本遺構に伴う施設は検出されなかった。遺構埋土からは弥生土器片が出土したが、図化には耐えなかった。

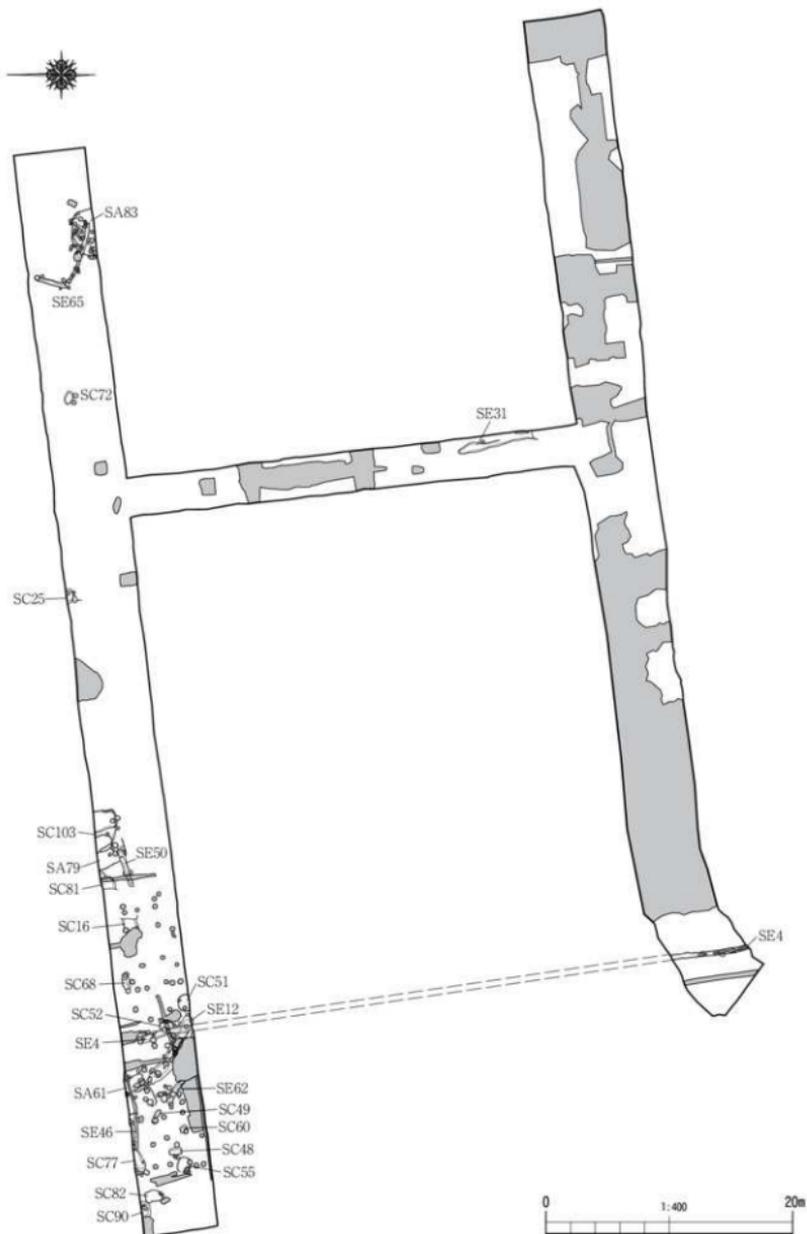
SC53は切り合い関係にあるSC103の東側に位置し、土層観察からSC103より新しいことがわかった。確認できた範囲では東西方向に1.74m + a、1.85m + aの隅丸長方形プランを想定させる。また南側から南西側に段を有する。遺構埋土からは弥生土器片が出土したが、図化には耐えなかった。

SC80はSA79とSC53の間にあり、SC103とは重なっており、土層観察からはSC103より新しいことがわかった。後述する出土遺物から古墳時代の遺構と考えられるが、ここで報告を行う。確認できた範囲では東西方向に1.37m、南北方向に1.35m + aで不整形楕円形プランを想定させる。南西側に不整形な段を有する。遺構埋土からは須恵器片・土師器片が出土したが、図化には耐えなかった。

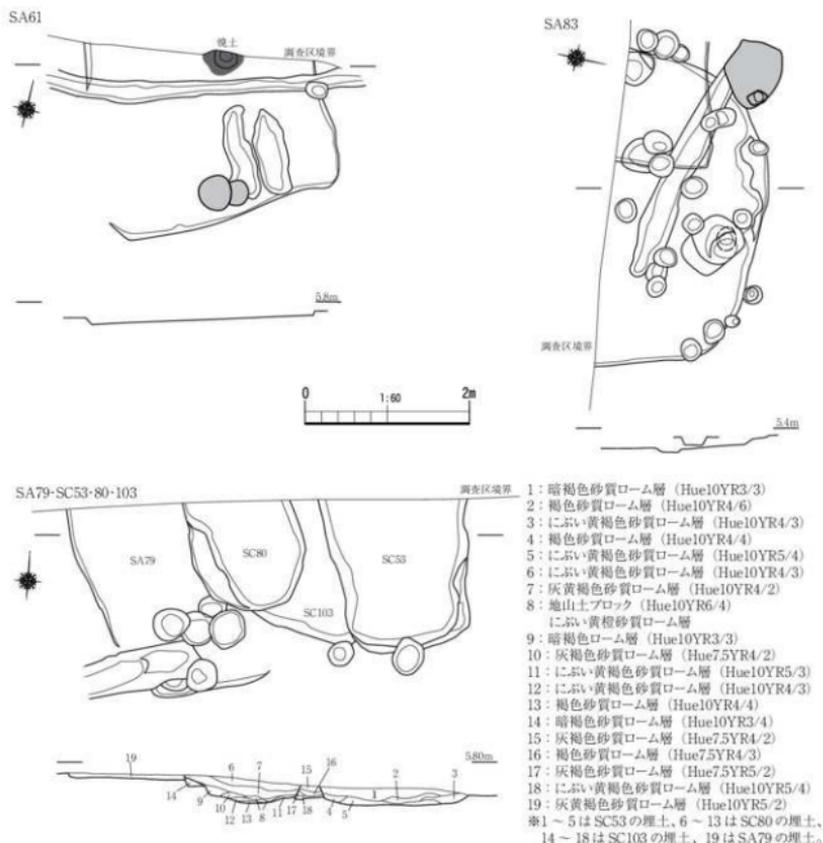
SC103は前述の通り、SC53とSC80に大きく切られているので平面プランは不明である。確認できた範囲では東西方向に1.55m + a、南北方向に1.09m + aである。遺構埋土からは弥生土器片が出土したが、図化には耐えなかった。

土坑（SC16・25・51・52・68・72・77・81・82・90・48・49・55・60）

ここで報告する土坑のうちSC16から90までの10基は出土遺物から帰属時期を決定した。



第4圖 弥生時代主要遺構配置圖 (S=1/400)



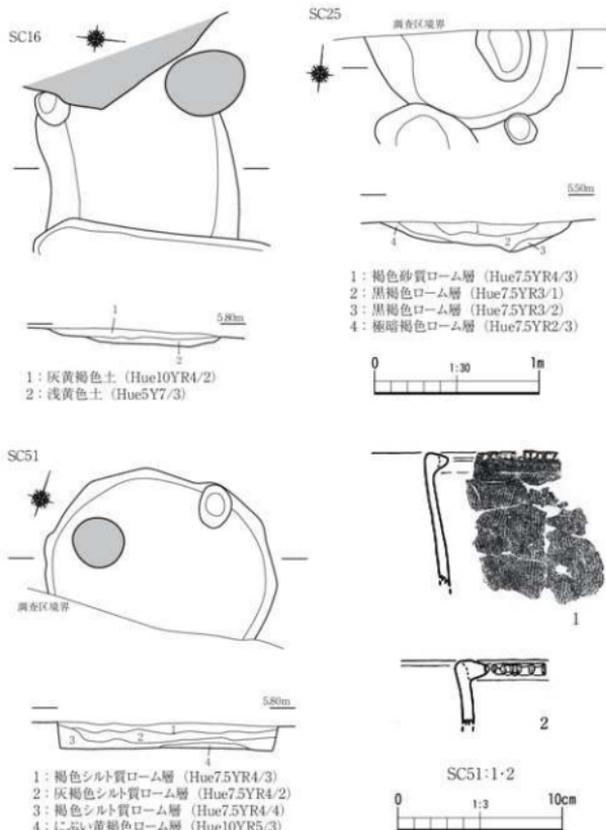
第5図 弥生時代竪穴住居跡実測図 (S=1/60)

その他の4基については遺物が伴わなかったが、遺構埋土が他の弥生時代の遺構と同様の色調と土質であったので弥生時代に帰属すると判断した。

SC16は西側に攪乱を受け、東側は古墳時代のSC17に切られており、平面プランは不明である。確認できた範囲では東西方向に0.87m + a、南北方向に0.84mである。遺構埋土からは弥生土器片が出土したが、図化には耐えなかった。

SC25は北側が調査区外に延びており、南部を中世のSC67と柱穴に切られる。確認できた範囲では東西方向1.18m + a、南北方向に0.57m + aで不整形円形プランを想定させる。遺構埋土からは弥生土器片が出土したが、図化には耐えなかった。

SC51は南側が調査区外に延びている。一部に攪乱を受け、北東部を柱穴1基に切られる。



第6図 弥生時代土坑 (S=1/30) 及び出土遺物 (S=1/3) 実測図①

確認できた範囲では東西方向に1.29m、南北方向に0.84m + aの不整形円形プランを想定させる。遺構埋土からは弥生土器片 (1・2) が出土している。

SC52はSE4と3基の柱穴と切り合い関係にあるが、新旧関係は不明である。確認できた範囲では東西方向に0.74m + a、南北方向に1.1mの不整形円形プランを想定させる。遺構埋土からは安山岩製の剥片 (3) が出土した。他に弥生土器片が見られたが、こちらは図化には耐えなかった。

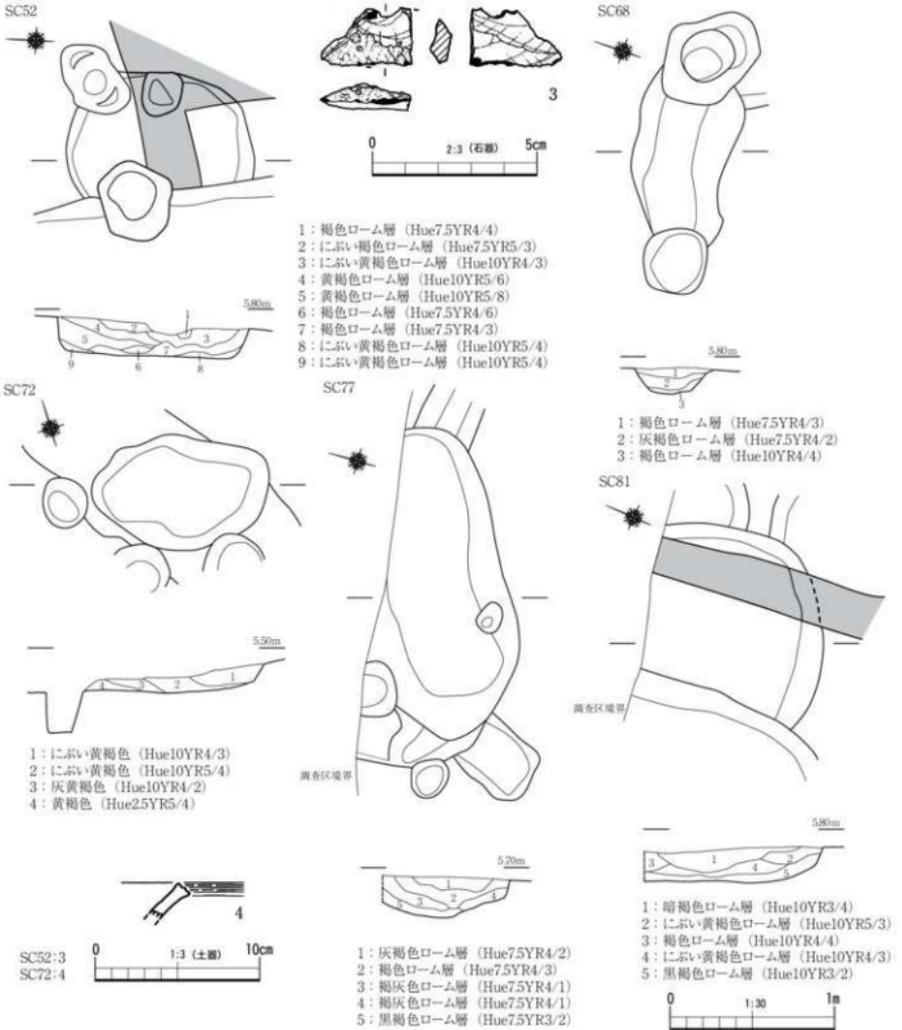
SC68は東西の端部が柱穴と切り合っているが、新旧関係は不明である。確認できた範囲では東西方向に1m + a、南北方向に0.55mで不整形円形プラン

を想定させる。遺構埋土からは弥生土器片が出土したが、図化には耐えなかった。

SC72は古墳時代～古代の不明遺構であるSX9に上部を切られている。確認できた範囲では東西方向に1.05m、南北方向に0.69mの不整形円形プランを呈する。遺構埋土からは凹線文の見られる弥生土器片 (4) が出土している。

SC77は東側がSE46と西側が土坑や柱穴と切り合い関係にあるが、新旧関係は不明である。また北側は調査区外に延びている。確認できた範囲では東西方向に1.82m、南北方向に0.93m + aで不整形長円形プランを想定させる。遺構埋土からは弥生土器片が出土したが、図化には耐えなかった。

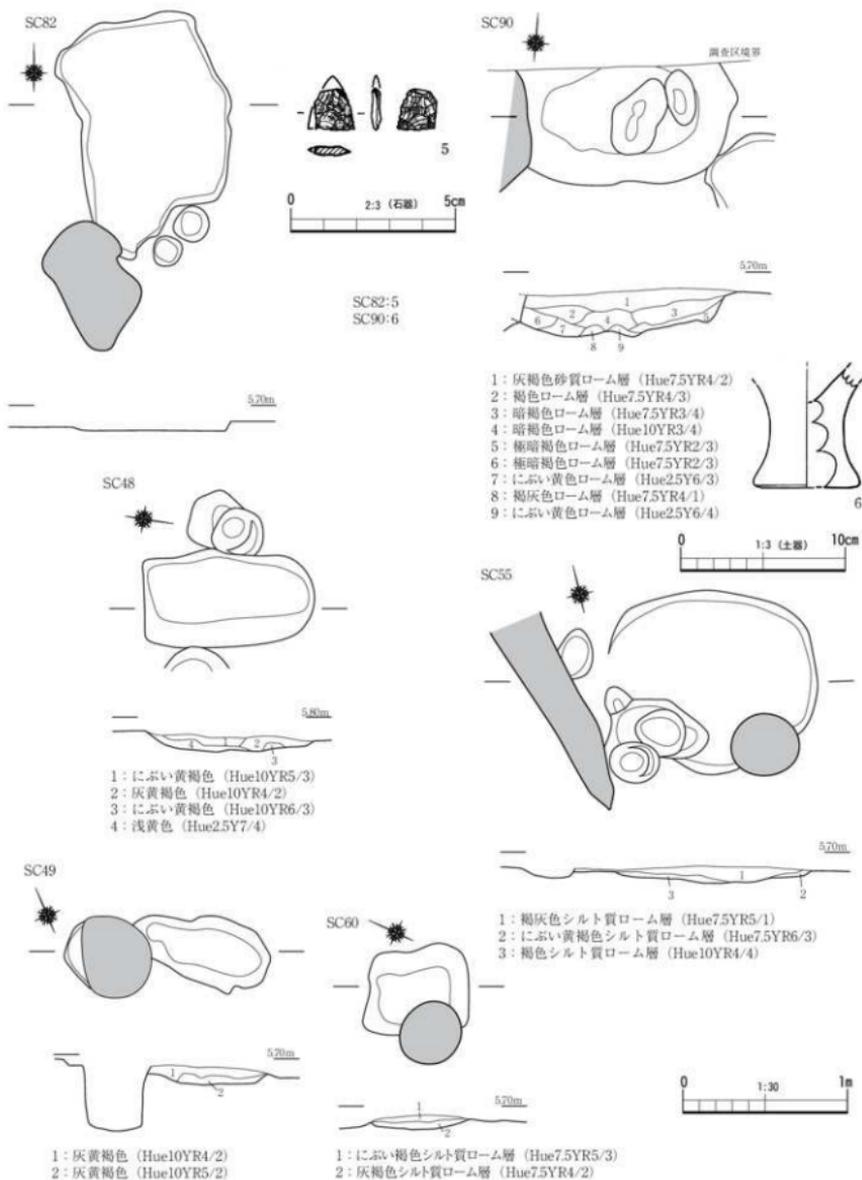
SC81は西側を中世のSC42に切れ、北側は調査区外に延びている。また一部に擾乱を受けている。確認できた範囲では東西方向1.04m + a、南北方向に1.23m + aで不整形円形プラン



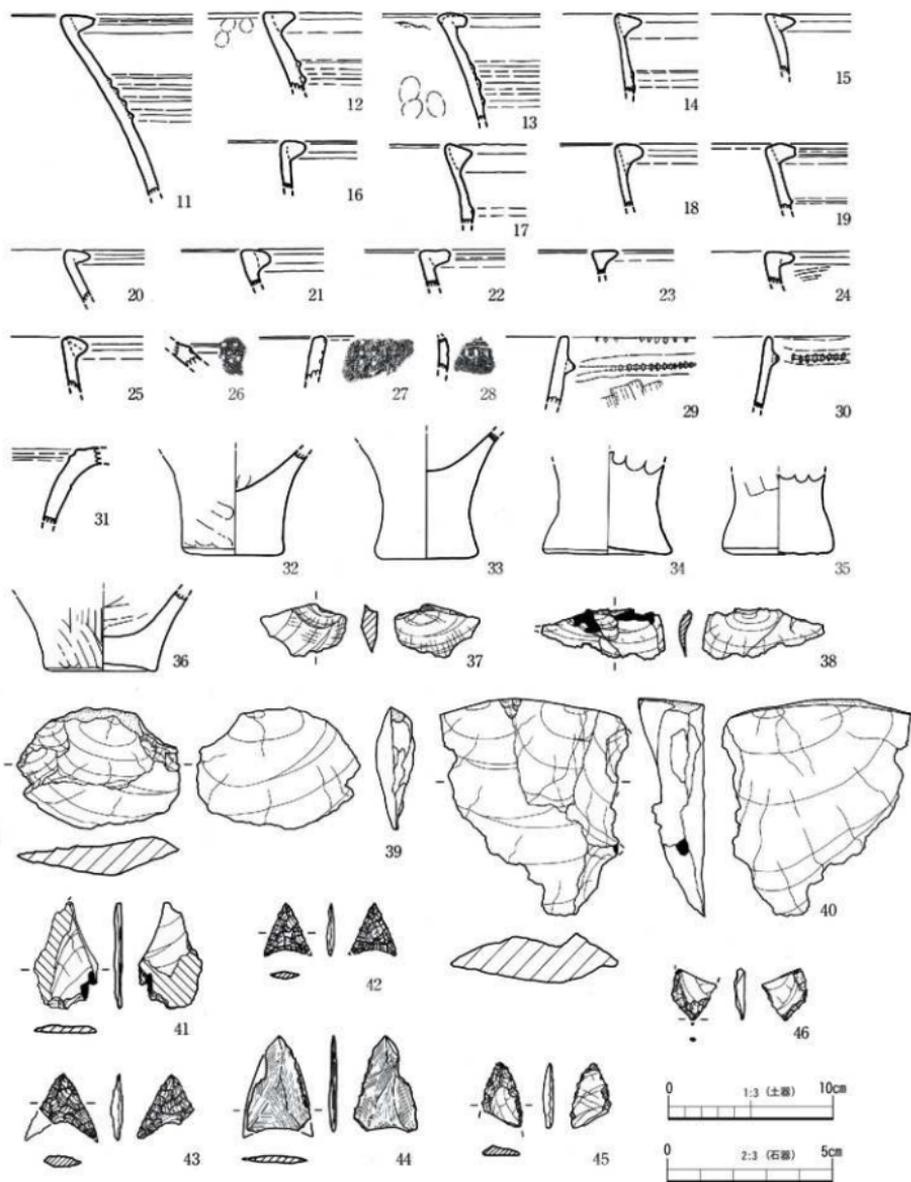
第7図 弥生時代土坑 (S=1/30) 及び出土遺物 (S=1/3・2/3) 実測図②

を想定させる。遺構埋土からは弥生土器片が出土したが、図化には耐えなかった。

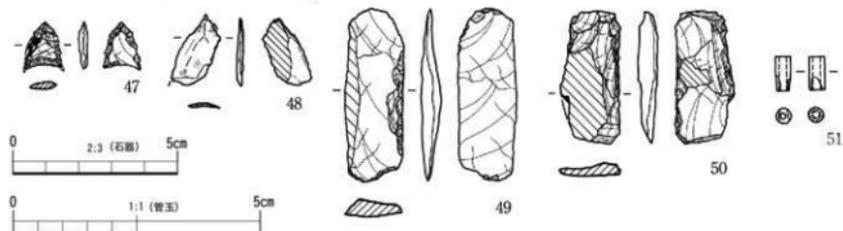
SC82は北側調査区の西端に位置し、南側に擾乱を受けている。確認できた範囲では東西方向に0.88m、南北方向に1.43m+aの不整形プランを呈する。遺構埋土からは打製石鏃(5)が出土した。他に弥生土器片も見られたが、こちらは図化には耐えなかった。



第8図 弥生時代土坑 (S=1/30) 及び出土遺物 (S=1/3・1/2) 実測図③



第10图 SE12出土遺物実測図① (S=1/3・2/3)



第11図 SE12 出土遺物実測図② (S=1/1・2/3)

SC90は西側に攪乱を受け、北側は調査区外に延びている。確認できた範囲では東西方向に1.26m + a、南北方向に0.71m + aの不整楕円形プランを想定させる。床面の東側には東西方向に2基の楕円形の掘り込みが見られる。遺構埋土からは弥生土器片(6)が出土している。

SC48は3基の柱穴と切り合っているが、新旧関係は不明である。東西方向に1.02m、南北方向に0.6mの不整形プランを呈する。

SC49は西側に攪乱を受けており、確認できた範囲では東西方向に0.85m + a、南北方向に0.41mの不整形楕円形プランを呈する。

SC55は南東方向に柱穴が切り合っているが新旧関係は不明で、その東側に攪乱を受ける。確認できた範囲では東西方向に1.24m、南北方向に1.12mの不整形プランを呈している。

SC60は西側に攪乱を受けており、確認できた範囲では東西方向に0.6m、南北方向に0.5mの不整形丸方形プランを呈する。

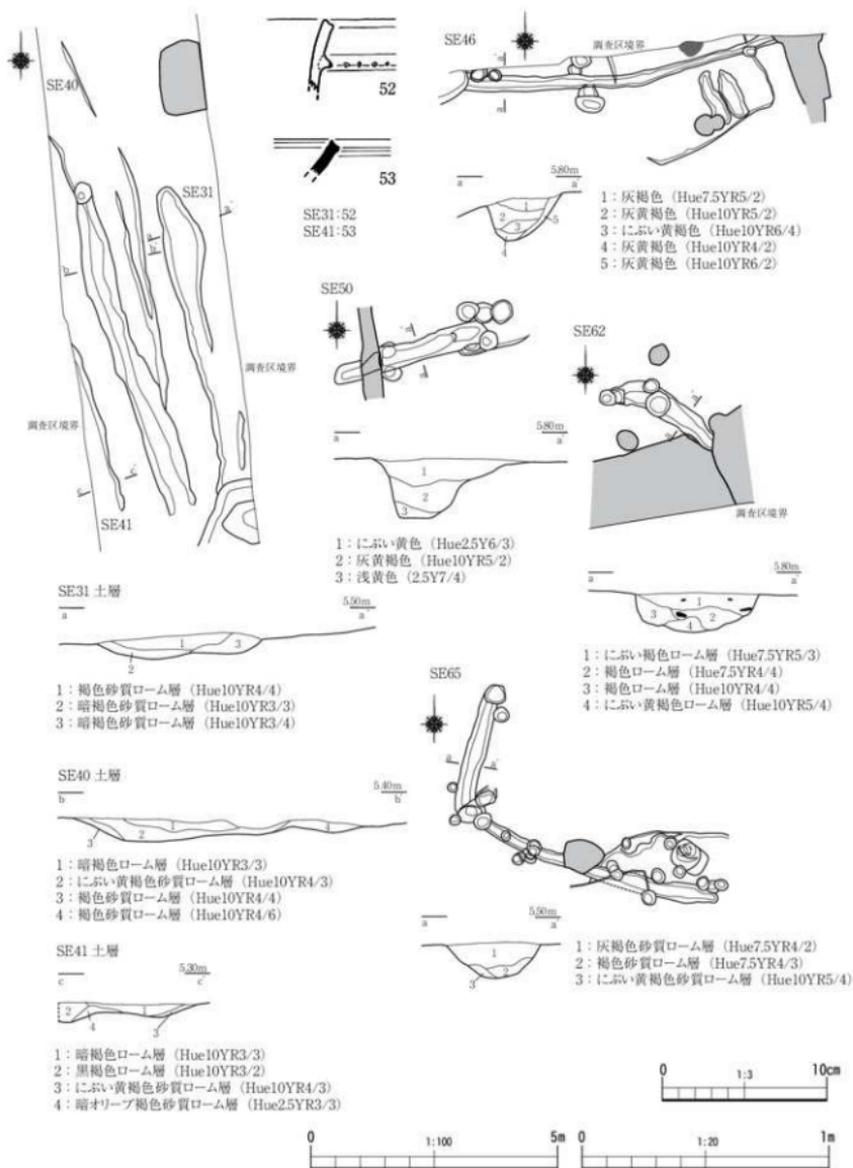
溝状遺構 (SE4・12・31・46・50・62・65) とそれに隣接する溝状遺構 (SE40・41)

SE4は北側調査区に立ち上がり部分があるが、攪乱を受けている。南側は調査区外に延びており、南側調査区まで続くことが確認された。北側調査区では4.12m、南側調査区では6.2mの長さで検出されており、幅は0.4m～0.55m、検出面からの深さは0.18mの逆台形状の断面形を呈する。南側調査区部分では床面に段が多数確認されている。また北側調査区部分ではSE12・SC53と切り合い関係にあり、SE12を切っていたが、SC52との新旧関係は不明である。遺構埋土からは弥生土器片(7～9)、砥石片(10)が出土した。

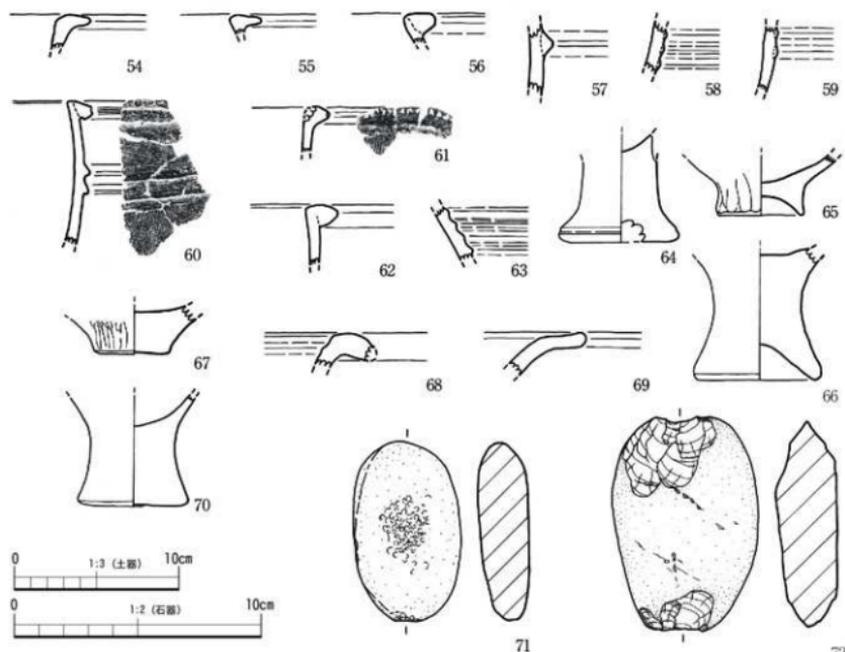
SE12は一部に攪乱を受けている。南東方向に長さ6.43mを測り、幅は0.8m～1.1mで検出面からの深さは0.6mの逆台形状の断面形を呈する。床面には円形や不整形楕円形の掘り込みが見られる。遺構埋土から弥生土器片(11～36)、剥片(37～41・49・50)、打製石鏃(42・43・45・47)、磨製石鏃(44・48)、石錐(46)、碧玉製の管玉(51)が出土している。なお、49・50は石材から磨製石鏃の素材剥片の可能性が考えられる。

SE31は中央調査区にあり、北西から南東方向に6.1mの長さで検出した。なお、南側の端は古代のSC36に切られている。また西側にSE40とSE41が同じ方線で隣接している。SE31の幅は0.5m～0.6mで、検出面からの深さは0.1mの皿状の断面形を呈している。遺構埋土からは弥生土器片(52)が出土している。

SE40は長さ7.5m、幅は0.7m～1.2mで検出面からの深さは0.1mの不整形な皿状の断面形



第12図 弥生時代溝状遺構 (S=1/100・1/20) 及び出土遺物 (S=1/3) 実測図②



第13図 弥生時代柱穴出土遺物実測図 (S=1/3・1/2)

を呈する。遺構埋土からは陶磁器片や瓦片が出土したので近世に帰属すると考えられるが、これらは図化には耐えなかった。

SE41は長さ3.2m、幅は0.46m + aで西側が調査区外に延びている。検出面からの深さは0.08mの断面形は不整形な皿状が想定される。遺構埋土からは東播系須恵器鉢片(53)が出土しており、本遺構は中世に帰属すると考える。

SE46は西側をSC77と切り合い関係にあり、東側は攪乱を受けている。東西方向に長さ6.4m + a、幅0.2m～0.32mで検出面からの深さは0.18mの不整形なU字形の断面形状を呈する。遺物は出土しなかったが、遺構埋土からは弥生時代のもものと判断した。

SE50は東西方向に長さ3.21m、幅は0.4mで、検出面からの深さは0.24mの断面形は不整形な逆台形状を呈する。遺構埋土からは弥生土器片が出土したが、図化には耐えなかった。

SE62は南東側端部が攪乱を受けていた。北西から南棟方向に長さ2.4m + a、幅は0.5mで検出面からの深さは0.22mの断面形は不整形な逆台形状を呈する。遺構埋土からは弥生土器片が出土したが、図化には耐えなかった。

SE65はSA83と多くの柱穴と切り合い関係にある。南北方向から2.3m付近でほぼ直角に曲がり、東西方向に5.5mの長さを呈する。幅は0.2m～0.4mで、検出面からの深さは0.16mの断面形はU字状を呈する。遺構埋土からは弥生土器片が出土したが、図化には耐えなかった。

第IV章 古墳時代・古代の調査

第1節 古墳時代の調査(第15図～第17図)

古墳時代の遺構としては竪穴住居跡2棟、土坑11基(SC80は前章で報告済み。また後述するが、この内5基については古代の帰属する可能性も考えられる)が検出された。

竪穴住居跡(SA64・69・99)

SA64は南側が調査区外に延びており、弥生時代のSE65・SA83と重なって検出された。この外に多数の柱穴と切り合い関係にあったため、本遺構の主柱穴は不明である。確認できた範囲では東西方向に3.05m、南北方向に1.03m + aの方形プランを想定させる。床面からは本遺構に伴う施設は確認されなかった。遺構埋土からは須恵器片(73～75)、土師器片(76・77)が出土している。

SA69は北側調査区の最も東端で検出された。本遺構の北側から東側にかけては東側に降る斜面となっており、本遺構もそれに削り取られていた。斜面の下には湧水が確認されており、常に水が湧いている状況であった。確認できた範囲では東西方向に2.82m + a、南北方向に2.16m + aの不整形プランを想定させる。本遺構の床面及び北側の傾斜地において主柱穴が2本確認された。遺構埋土からは土師器片(78・79)が出土している。

SA99は後述するSX9の東端で重なって検出された。北側から西側の大半をSX9に切られており、その他にも多数の柱穴と切り合い関係にあり、本遺構の主柱穴は不明である。また南側は調査区外に延びている。確認できた範囲では北東部においてわずかにコーナー部分が見られることから東西方向に1.23m + a、南北方向に2.57m + aの不整形プランが想定される。遺構埋土からは土師器片(80)が出土している。

土坑(SC17～19・47・70・10・43・57～59)

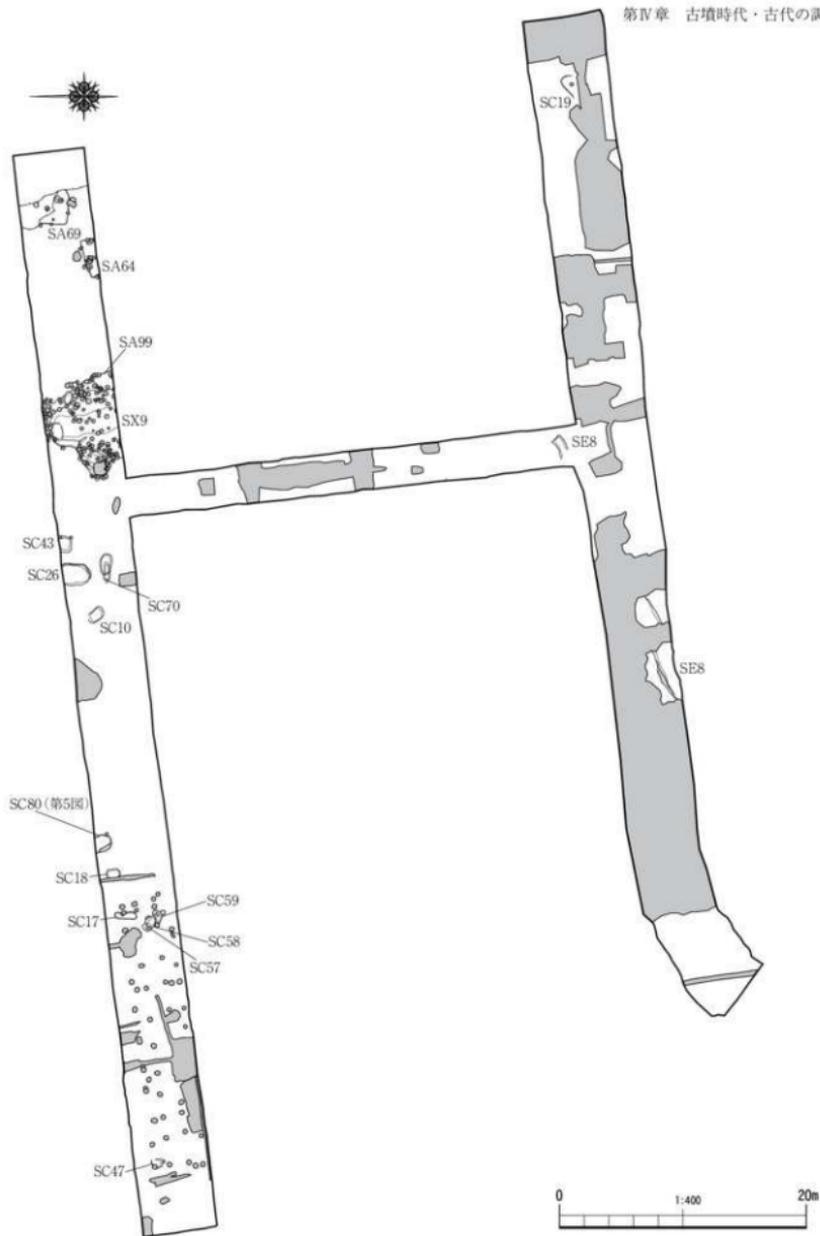
ここで報告する土坑のうちSC10・43・57～59については出土遺物が土師器の小片であったため、古墳時代か古代かいずれに帰属するものかは不明瞭であるが、ここでまとめておく。

SC17は弥生時代のSC16と重なって検出された。この他に柱穴に切られ、また一部に攪乱を受けている。確認できた範囲では東西方向に0.55m、南北方向に1.76mの不整形楕円形プランを呈する。遺構埋土からは須恵器片が出土したが、図化には耐えなかった。

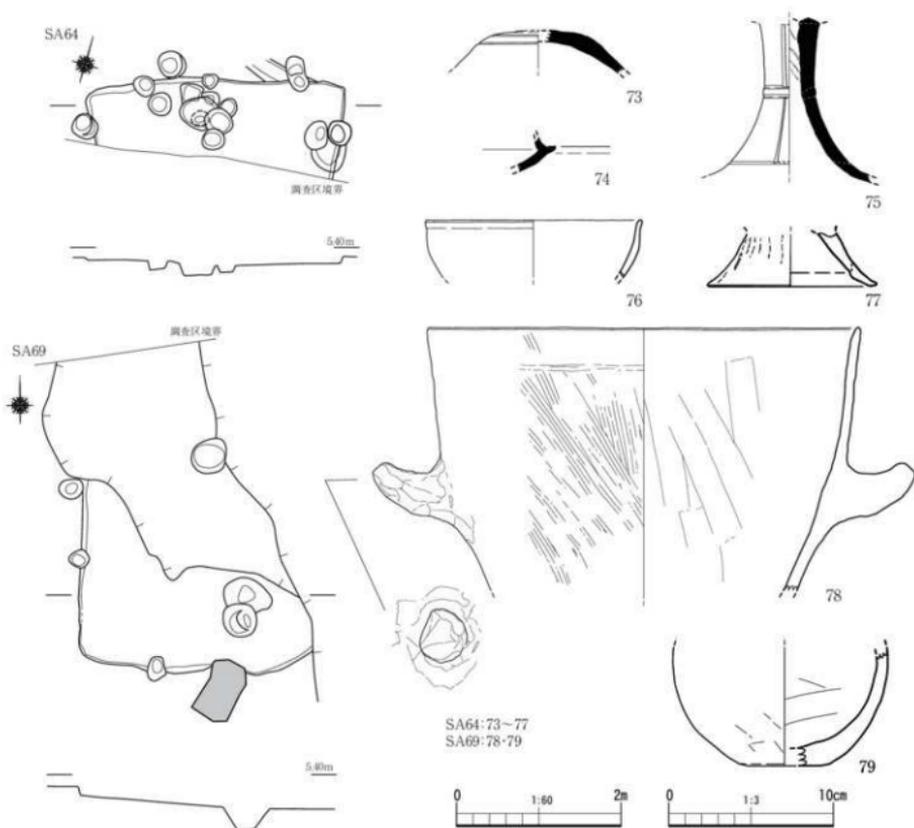
SC18は西側が調査区外に延びている。確認できた範囲では東西方向に0.68m + a、南北方向に1.12mの不整形楕円形プランを想定させる。遺構埋土からは須恵器片、土師器片が出土したが、図化には耐えなかった。

SC19は南側調査区で検出された。東側を中世のSE25に切られ、南側は攪乱を受けている。また南西側は地形の傾斜と共に消滅している。確認できた範囲では南西北東方向に1.76m + a、北西南東方向に1.07m + aだが、残存状況が悪いため平面プランは不明である。遺構埋土からは須恵器片、土師器片が出土したが図化には耐えなかった。

SC47は北東側に攪乱を受けており、東側は地形の傾斜と共に消滅している。確認できた範囲では東西方向に0.74m + a、南北方向に0.91mの不整形台形プランを呈する。遺構埋土からは



第14図 古墳・古代主要遺構配置図 (S=1/400)



第15図 古墳時代竪穴住居跡 (S=1/60) 及び出土遺物 (S=1/3) 実測図

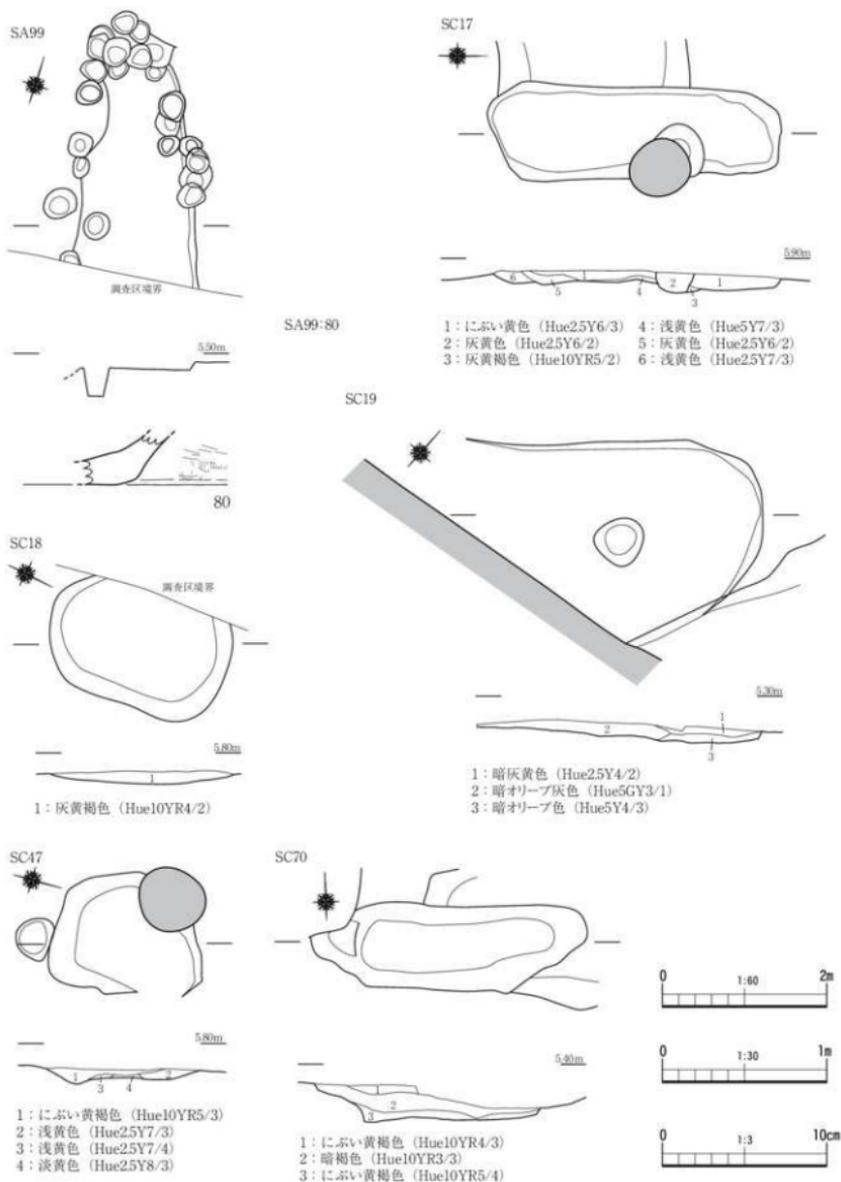
須恵器片、土師器片が出土したが、図化には耐えなかった。

SC70 は中世の SC28 に北西側を、同じく SC54 に東側を切られている。確認できた範囲では 1.64m、南北方向に 0.5m の不整長楕円形プランを呈するもので西側には段を有する。遺構埋土からは須恵器片、土師器片が出土したが、図化には耐えなかった。

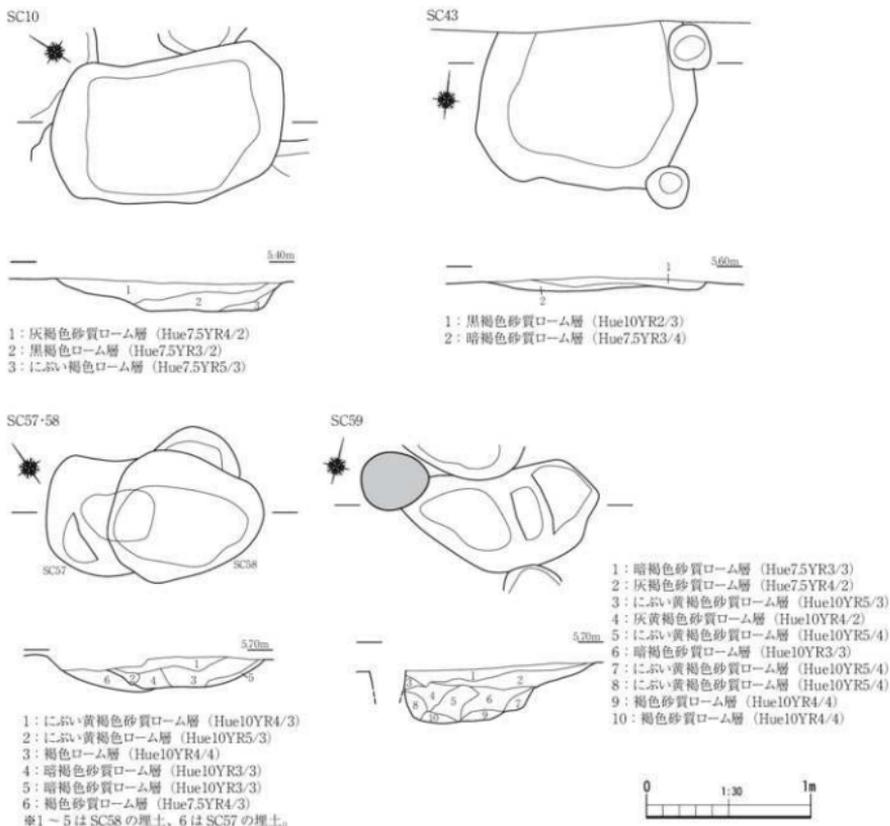
SC10 は中世の SC66 と SC27 に東側を、同じく SE24 に南側を切られている。確認できた範囲では北西南東方向に 1.4m、北東南西方向に 0.86m の不整隅丸方形プランを呈する。立ち上がりは南東側が急で、北西側が緩やかに立ち上がる形状である

SC43 は北側が調査区外に延びており、東側は柱穴に切られている。確認できた範囲では東西方向に 1.32 m、南北方向に 0.98m + a の不整隅丸方形プランを呈する。

SC57 と SC58 は切り合い関係にあり、土層観察から SC58 が新しいことが確認された。な



第16図 古墳時代竪穴住居跡 (S=1/60)・土坑 (S=1/30) 及び出土遺物 (S=1/3) 実測図



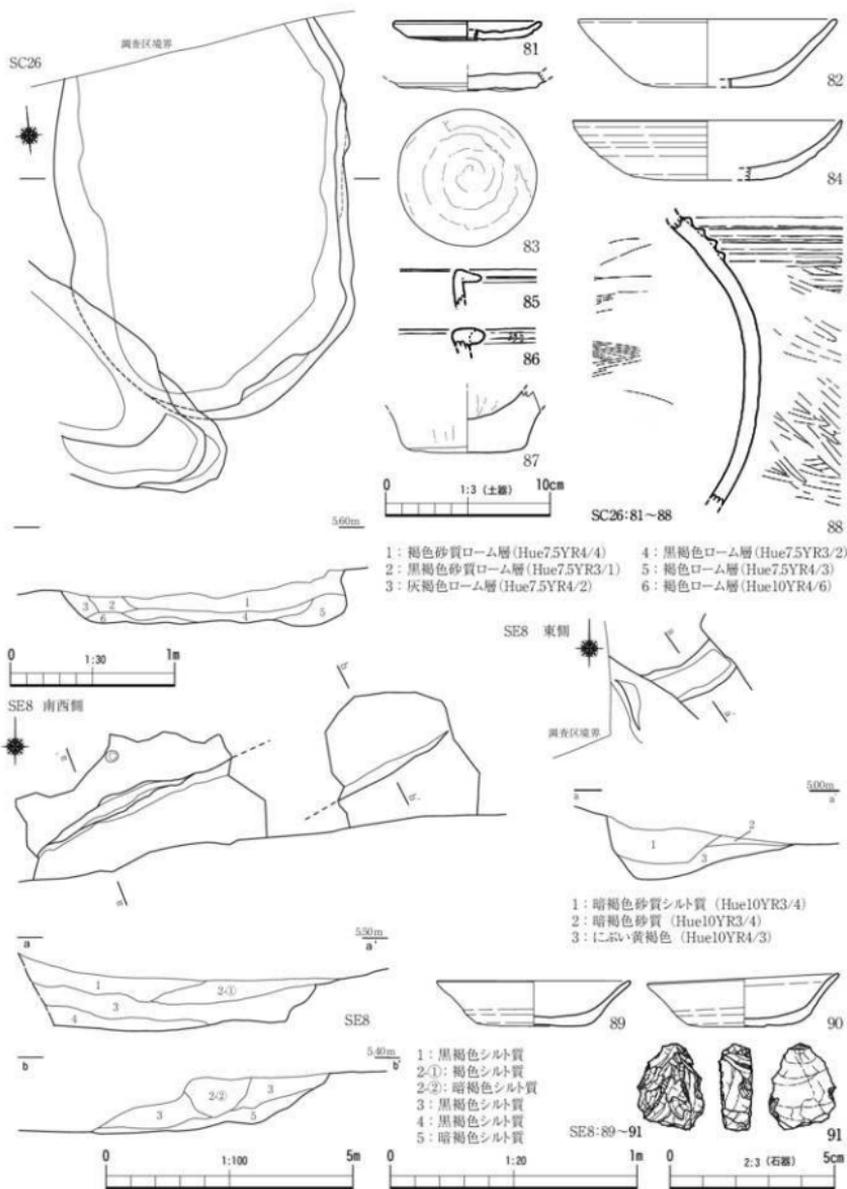
第17図 古墳時代土坑実測図 (S=1/30)

お、両者共に一部に攪乱を受けており、確認できた範囲でSC58は北西南東方向に0.89m + a、北東南西方向に0.81mの不整楕円形プランを呈する。またSC57は北西南東方向に0.63m + a、北東南西方向に0.71mの不整隅丸方形プランを呈する。

SC59は北側をSC58に切られ、西側に攪乱を受けている。確認できた範囲では東西方向に1.18m + a、南北方向に0.55m + aの不整楕円形プランを呈する。東側に段を二箇所有する。

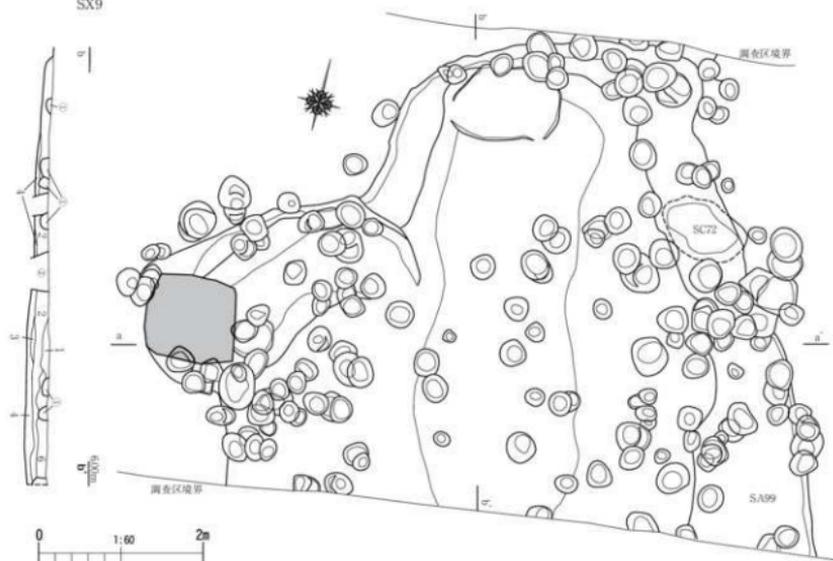
第2節 古代の調査 (第18～21図)

古代の遺構としては土坑1基、溝状遺構1基、多数の柱穴が検出された。またこの他に古墳時代から古代の不明遺構が1基検出されている。柱穴については建物等並ぶものではなく、出土遺物を第21図に掲載している。

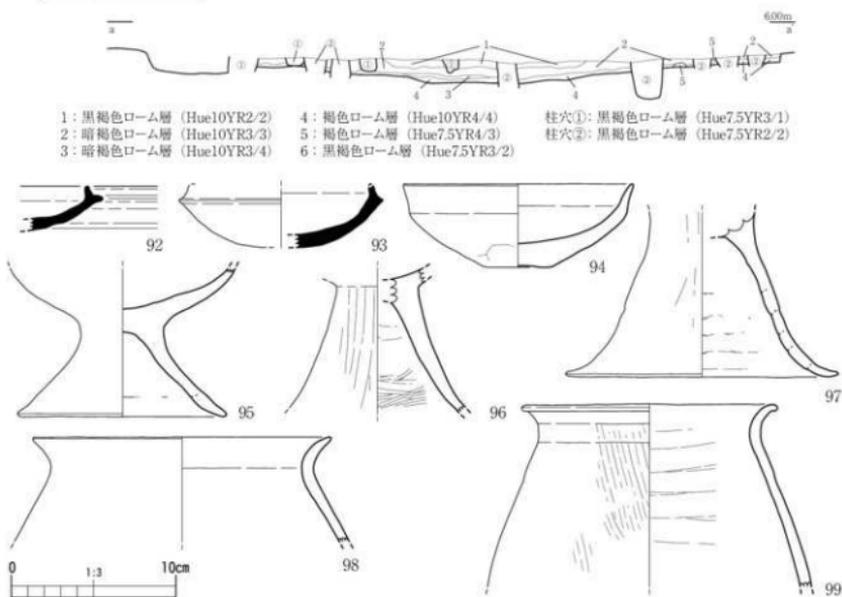


第18図 古代土坑 (S=1/30)・溝状遺構 (S=1/100・1/20) 及び出土遺物 (S=1/3・2/3) 実測図

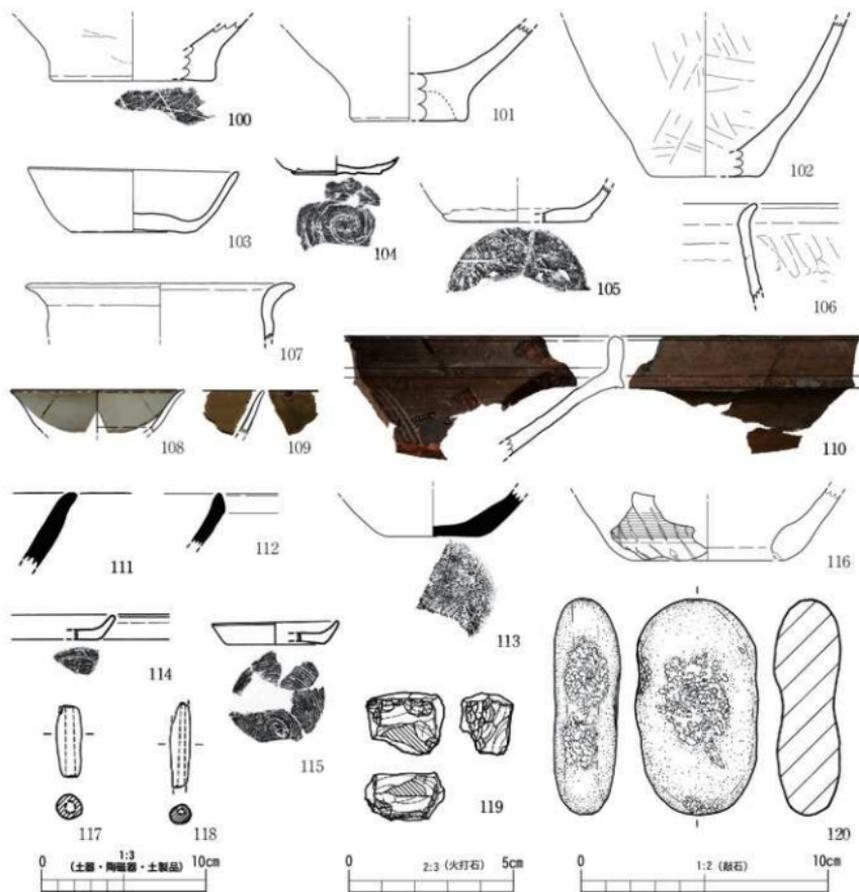
SX9



- 1: 黒褐色ローム層 (Hue10YR2/2) 4: 褐色ローム層 (Hue10YR4/4) 柱穴①: 黒褐色ローム層 (Hue7.5YR3/1)
 2: 暗褐色ローム層 (Hue10YR3/3) 5: 褐色ローム層 (Hue7.5YR4/3) 柱穴②: 黒褐色ローム層 (Hue7.5YR2/2)
 3: 暗褐色ローム層 (Hue10YR3/4) 6: 黒褐色ローム層 (Hue7.5YR3/2)



第19図 古墳時代～古代不明遺構 (S=1/60) 及び出土遺物 (S=1/3) 実測図



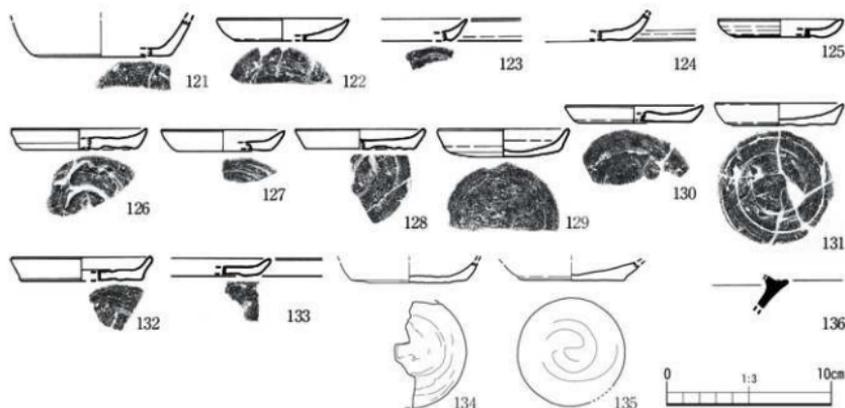
第20図 SX9出土遺物実測図 (S=1/3・2/3・1/2)

土坑 (SC26)

SC26は南東部がSC67に切れ、北側は調査区外に延びている。確認できた範囲では東西方向に1.76m、南北方向に2.29m + aの不整楕円形プランを想定させる。南東部に小規模な段を有し、東側はややオーバーハングしている。遺構埋土からは土師器皿(81)、坏(82~84)が出土している。他に多くの弥生土器(85~88)が混入していた。

溝状遺構 (SE8)

SE8は南側調査区の中央よりやや西側から方線を北東南西方向に向けて、中央調査区の南側にまで延びて中世のSC33に切られている。なお、南側調査区においては著しく攪乱を受けて



第21図 古代柱穴出土遺物実測図 (S=1/3)

おり南西側は調査区外に延びている。確認できた範囲では南側調査区で長さ8.42m、幅1.76m + a以上、中央調査区では長さ1.48m、幅0.8mの規模を有している。なお、中央調査区部分では土師器坏2点(89・90)がまとまって出土した(図版4の下段)。その他に遺構埋土から火打石(91)も出土している。

古墳時代～古代の不明遺構 (SX9)

SX9は北側調査区の中央より東側に位置する。一部に攪乱を受け、多数の柱穴に切られている状況が検出時に確認できた。また、弥生時代のSC72、古墳時代のSA99などを切っていた。調査期間の都合上、本遺構を切っている柱穴を把握して、新しいものから順番に調査するという工程を守ることができなかった。そこで土層観察用のあぜを設定して、遺構埋土を全て掘削して、床面で検出できた遺構の図化を行うこととした。その結果、平面図を見ると床面の中央部に柱穴が少ない印象を受けるが、本来は周辺部と同様の密度で柱穴が検出できていたことを報告しておく。なお、南側は調査区外に延びており、確認できた範囲では東西方向に6.4m、南北方向に5.79m + aの西側が一部張り出す不整形なプランで、床面が緩やかに立ち上がる皿状の断面形を呈する。また西側の張り出す部分の床面は不整形な段を持っていた。

遺構埋土からは弥生土器片、須恵器片(92・93・111～113)、土師器片(94～107・114・115)、陶磁器片(108～110・116)、土錘(117・118)、火打石(119)、敲石(120)が出土している。本遺構の出土遺物は弥生時代から中世までの様々なものが混入しており、一時期に収まるものではない。埋土を掘削していたときに確認したが、本遺構を切っている多数の柱穴の埋土からは中世の遺物が出土していた。

本遺構は立ち上がりも床面も不整形な状況であり、一時は自然地形とも考えたものの、弥生時代と古墳時代の遺構を切っている点、埋土に古代の資料が混入している点から古墳時代以降に造成を行った痕跡である。そしてこの遺構は中世の段階には完全に埋没しており、そこに建物(柱穴)が築かれていたと考えられる。

第V章 中世・近世の調査

中世・近世の遺構は建物跡4棟、土坑13基、溝状遺構10条と多数の柱穴が検出された。

掘立柱建物跡 (SB1～4)

全て北側調査区で検出され、長軸を北東方向から南西方向に向ける。なお、この建物跡のほかにも大量の柱穴が検出されており、その多くが北西南東方向と北東南西方向に列状を呈していることから、今回認識できたもの以外にも建物跡が存在していた可能性は高いと考えられる。

SB1はSB2～4とは離れており、唯一SE5の西側で検出された。南西方向が調査区外に伸びており、全貌が確認できていないが桁行6間で11.76m、梁行3間で4.58mの規模を呈していると推定される。柱穴の埋土からは土師器片(137・138)、鉄滓等が出土している。

SB2は北側調査区と中央調査区にまたがって検出されている。南東方向が調査区外に伸びており、全貌は確認できていないが、桁行3間で4.93m、梁行3間で3.32mの規模を呈していると推定される。柱穴の埋土からは青磁片(139)、須恵器片(140)が出土している。

SB3は前章で報告したSX9やSB4と重なって検出された。桁行4間で3.88m、梁行3間で3.6mの規模を呈している。柱穴の埋土からは青磁片(141)、鉄滓等が出土している。

SB4は桁行3間で4.5m、梁行2間で2.97mの規模を呈する総柱の建物である。柱穴の埋土からは土師器片(142～144)、陶器片、滑石製石鍋片、鉄滓等が出土している。

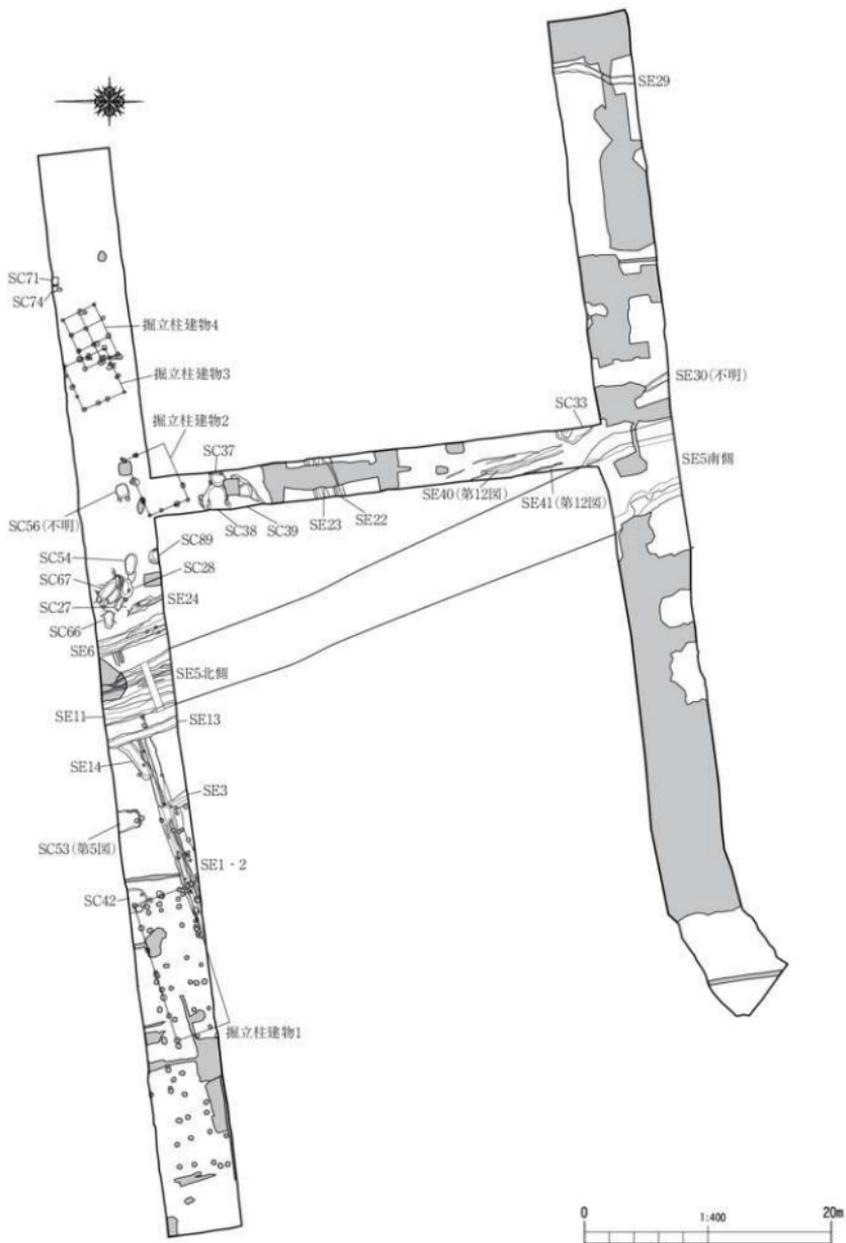
土坑 (SC27・28・33・37～39・42・54・66・67・71・74・89)

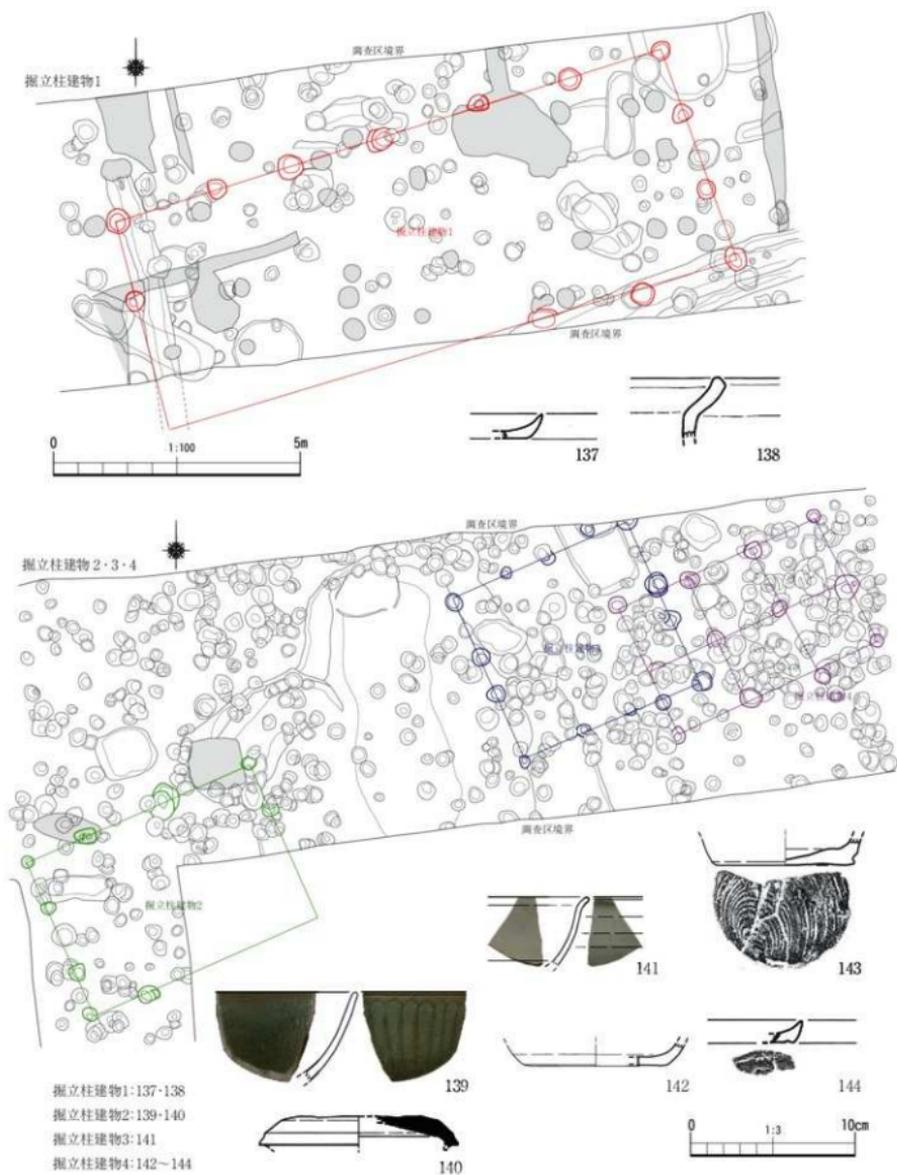
SC27とSC28は北西南東方向に並列しており、SC27は南東側をSC28と柱穴に切られている。確認できた範囲ではSC27は北西南東方向に1.14m + a、南西北東方向に0.5mの不整長楕円形プランを呈する。遺構埋土からは青磁片(145)が出土している。またSC28は東西方向に1.61m、南北方向に0.97mの不整楕円形プランを呈している。床面には柱穴が1基検出された。遺構埋土からは底部に糸切りの痕跡のある土師器片(146)が出土している。

SC33は中央調査区で検出されており、東側が調査区外に伸びている。確認できた範囲では東西方向に1.27m + a、南北方向に2.96m + aの不整形形状のプランが想定される。床面には調査区境界付近に不整楕円形プランを想定させる掘り込みが検出された。

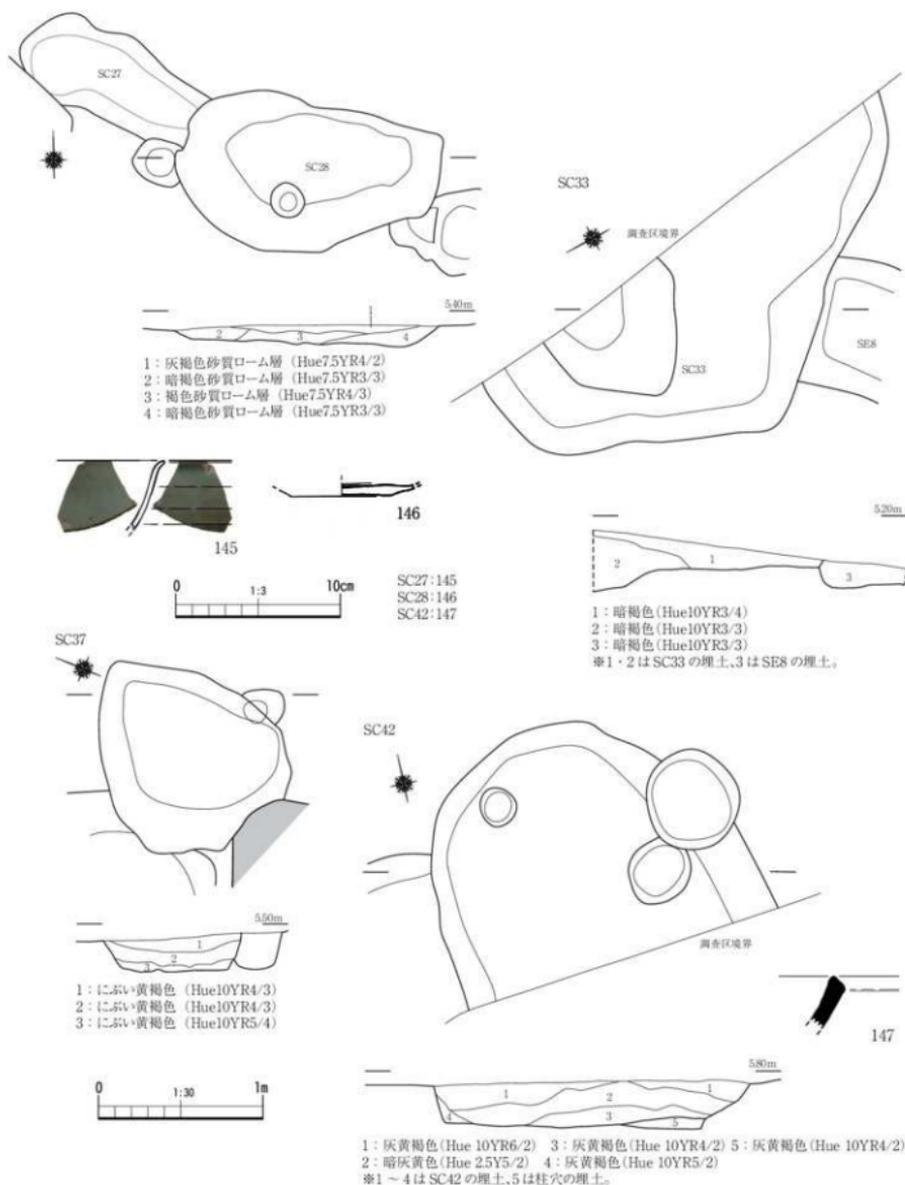
SC37は中央調査区で検出されており、西側がSC38を切る。また、南側に攪乱を受けている。確認できた範囲では東西方向に1.08m、南北方向に1.28m + aの不整形三角形プランを想定させる。遺構埋土からは底部糸切り痕跡の土師器片等が出土したが、図化には耐えなかった。

SC38・39は中央調査区で南北方向に並列しており、両者共に西側が調査区外に伸びている。土層観察からSC38が新しいことが確認された。また一部に攪乱を受けている。これらは切り合いが把握できないまま掘削を行ったため、埋土中の遺物は混在している。確認できた範囲ではSC38は東西方向に2.1m + a、南北方向に2.11mの不整楕円形プランを想定させ、南北の立ち上がりには段を有する。SC39は東西方向に2.79m + a、南北方向に2.7m + aの不整楕円形プランを想定させる。南側には段を有し、床面には東西方向に1.18m、南北方向に1.2mの不整形三角形の掘り込みが検出された。両者の遺構埋土からは青磁片(148・149)とその

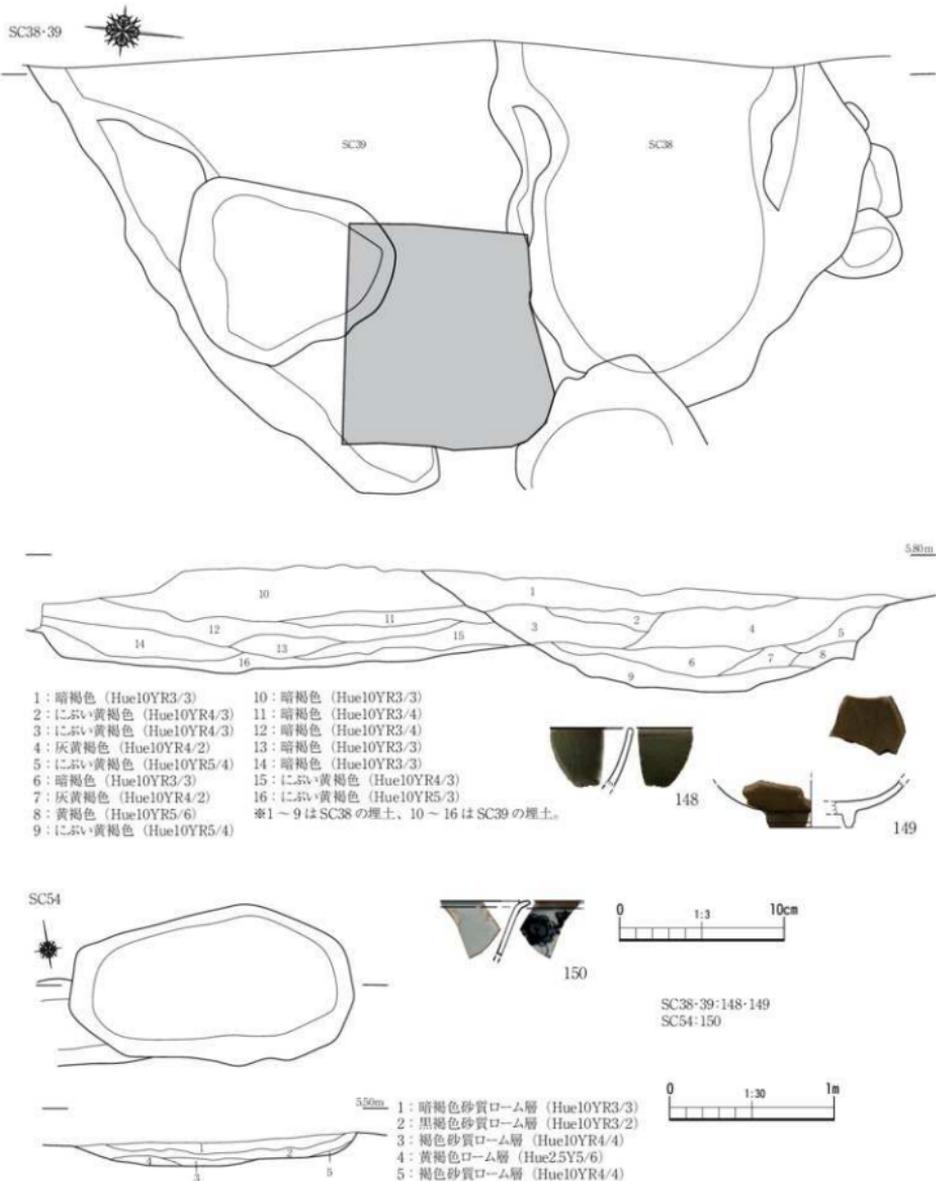




第23図 中世掘立柱建物平面図 (S=1/100) 及び出土遺物 (S=1/3) 実測図

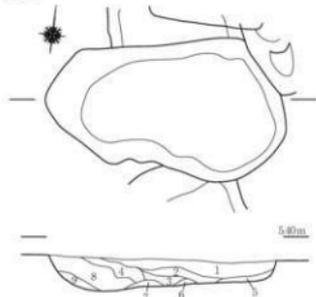


第24図 中世土坑 (S=1/30) 及び出土遺物 (S=1/3) 実測図①



第25図 中世土坑 (S=1/30) 及び出土遺物 (S=1/3) 実測図②

SC66



- 1: 暗褐色砂質ローム層 (Hue10YR3/3)
- 2: 黒褐色砂質ローム層 (Hue10YR3/2)
- 3: 黒褐色ローム層 (Hue10YR2/3)
- 4: にぶい黄褐色ローム層 (Hue10YR4/3)
- 5: 灰黄褐色ローム層 (Hue10YR5/2)
- 6: 灰黄褐色ローム層 (Hue10YR5/2)
- 7: 明黄褐色ローム層 (Hue2.5Y6/6) 地山の可能性あり
- 8: 極暗褐色ローム層 (Hue7.5YR2/3)
- 9: 灰黄褐色ローム層 (Hue10YR4/2)

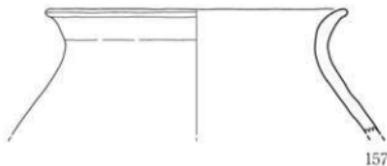
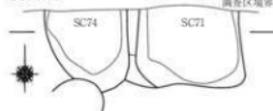


SC66:151
SC67:152-153
SC71:74:154-157
SC89:158

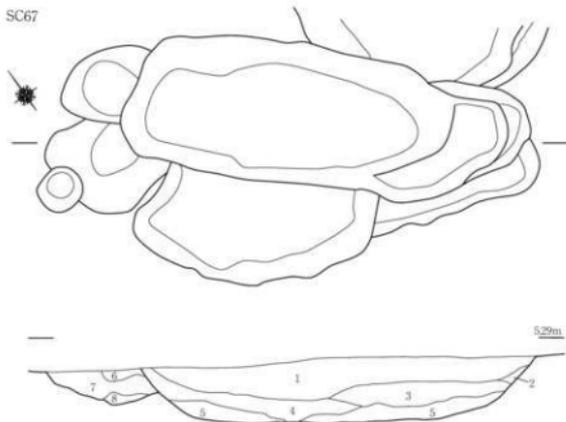


151

SC74-71



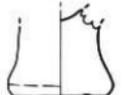
SC67



- 1: 暗褐色 (10YR3/3)
 - 2: にぶい黄褐色 (Hue10YR4/3)
 - 3: 暗褐色 (Hue10YR3/4)
 - 4: 暗褐色 (Hue10YR3/3)
 - 5: にぶい黄褐色 (Hue10YR4/3)
 - 6: にぶい黄褐色 (Hue10YR4/3)
 - 7: 褐色 (Hue7.5YR4/3)
 - 8: 褐色 (Hue7.5YR4/4)
- ※1～5はSC67の埋土。6～8は弥生時代の土坑の埋土と考えられる。



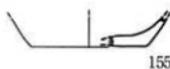
152



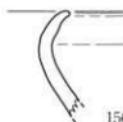
153



154



155



156

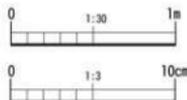
SC89



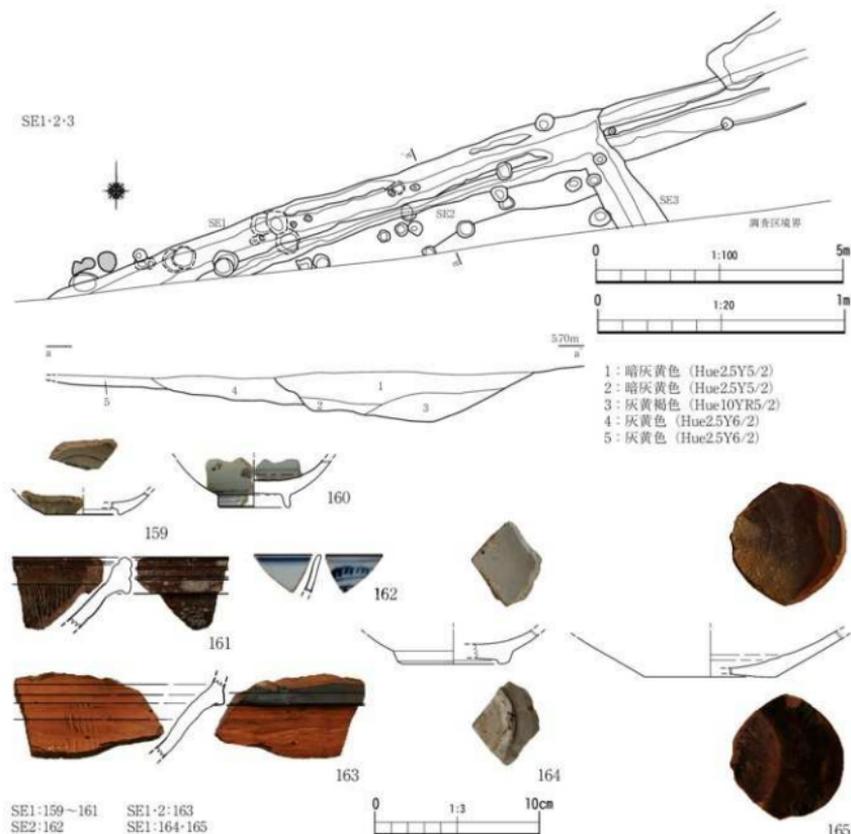
- 1: 黒褐色 (Hue10YR2/2)
- 2: 暗褐色 (Hue10YR3/3)
- 3: 暗褐色 (Hue10YR3/3)



158



第26図 中世土坑 (S=1/30) 及び出土遺物 (S=1/3) 実測図③



第27図 中世～近世溝状遺構 (S=1/100・1/20) 及び出土遺物 (S=1/3) 実測図

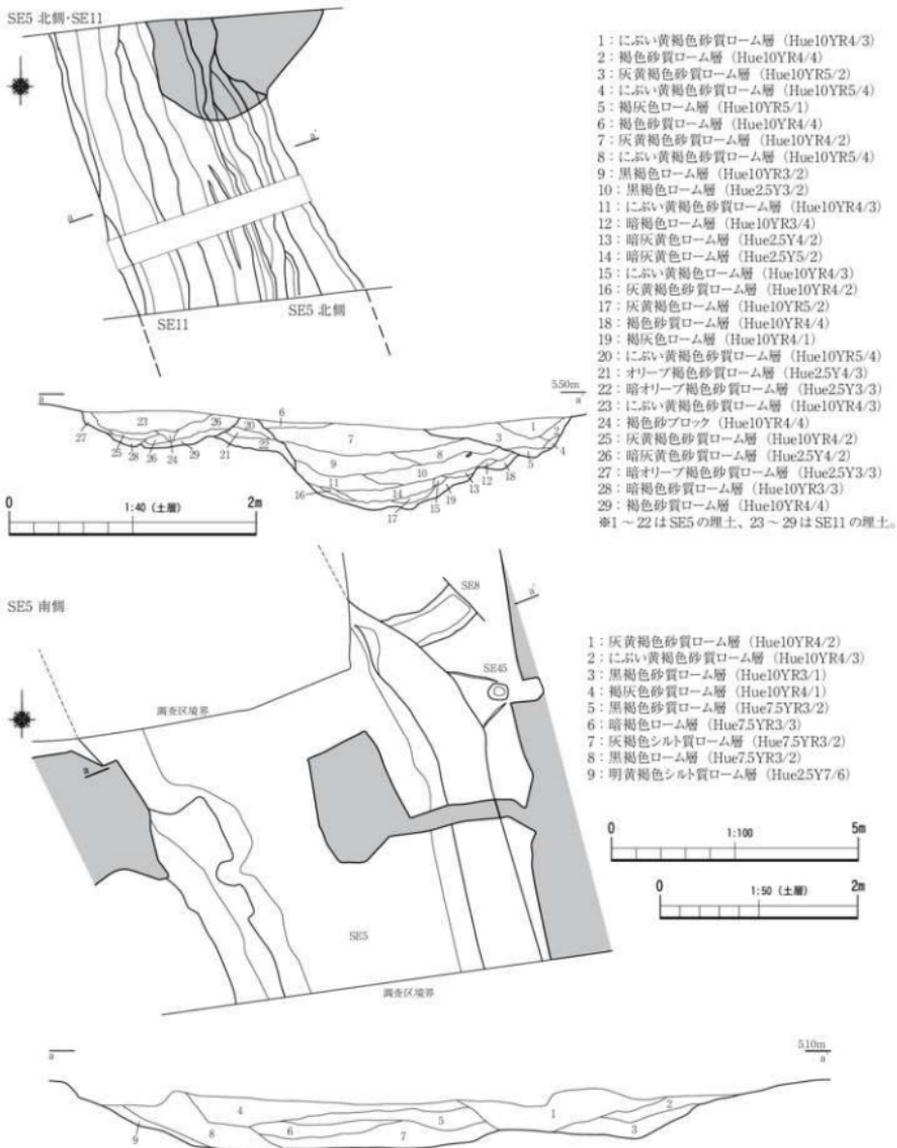
他に土師器片が出土したが、こちらは図化には耐えなかった。

SC42は北側が調査区外に延びており、西側を柱穴2基と重なっている。確認できた範囲では東西方向に1.96m + a、南北方向に1.49m + aの不整形円形プランを想定させる。南側床面からは柱穴が1基検出された。遺構埋土からは東播磨系須恵器片(147)が出土している。

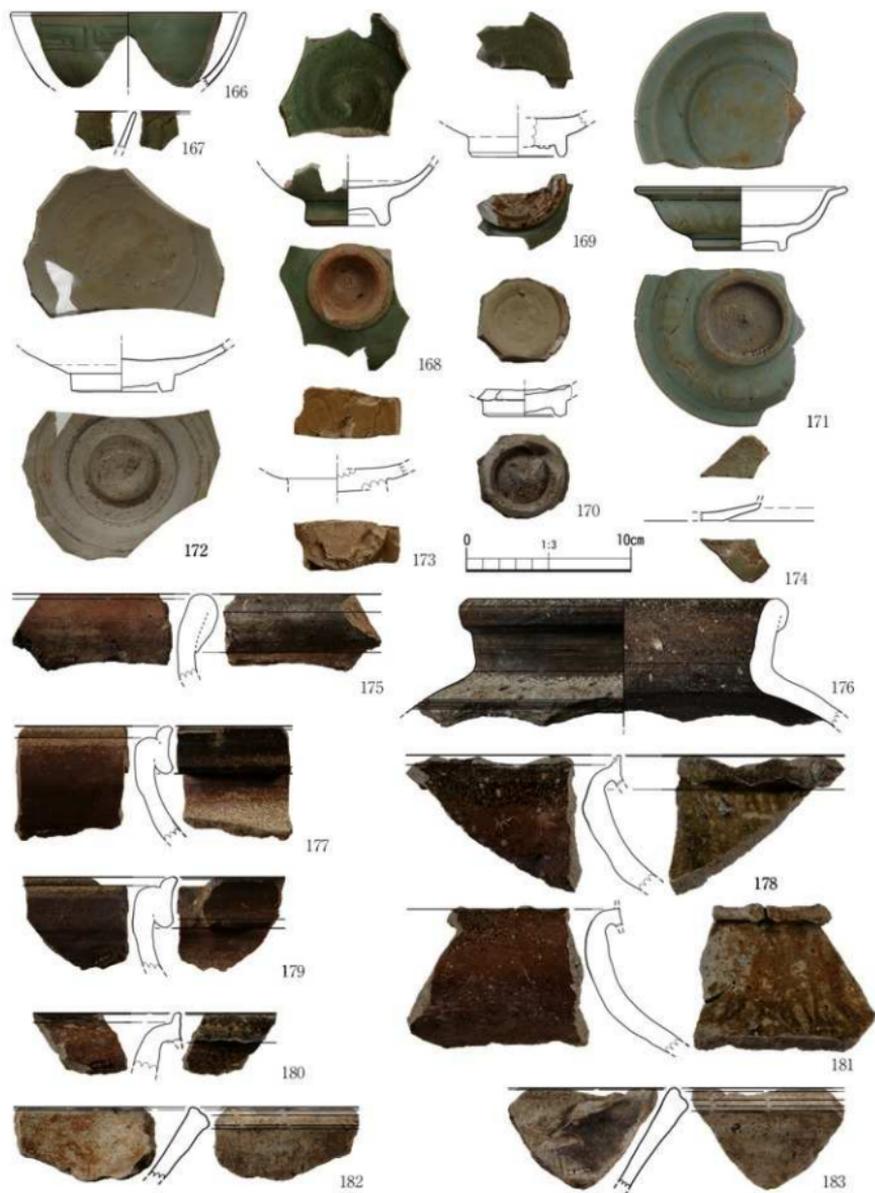
SC54は1.71m × 0.94mの不整形円形プランを呈する。遺構埋土からは青花片(150)が出土している。

SC66は北東方向を柱穴に切られている。確認できた範囲では東西方向に1.46m、南北方向に0.88mの不整形円形プランを呈する。遺構埋土からは土錘(151)とその他にも青磁片、陶器片が出土したが、こちらは図化には耐えなかった。

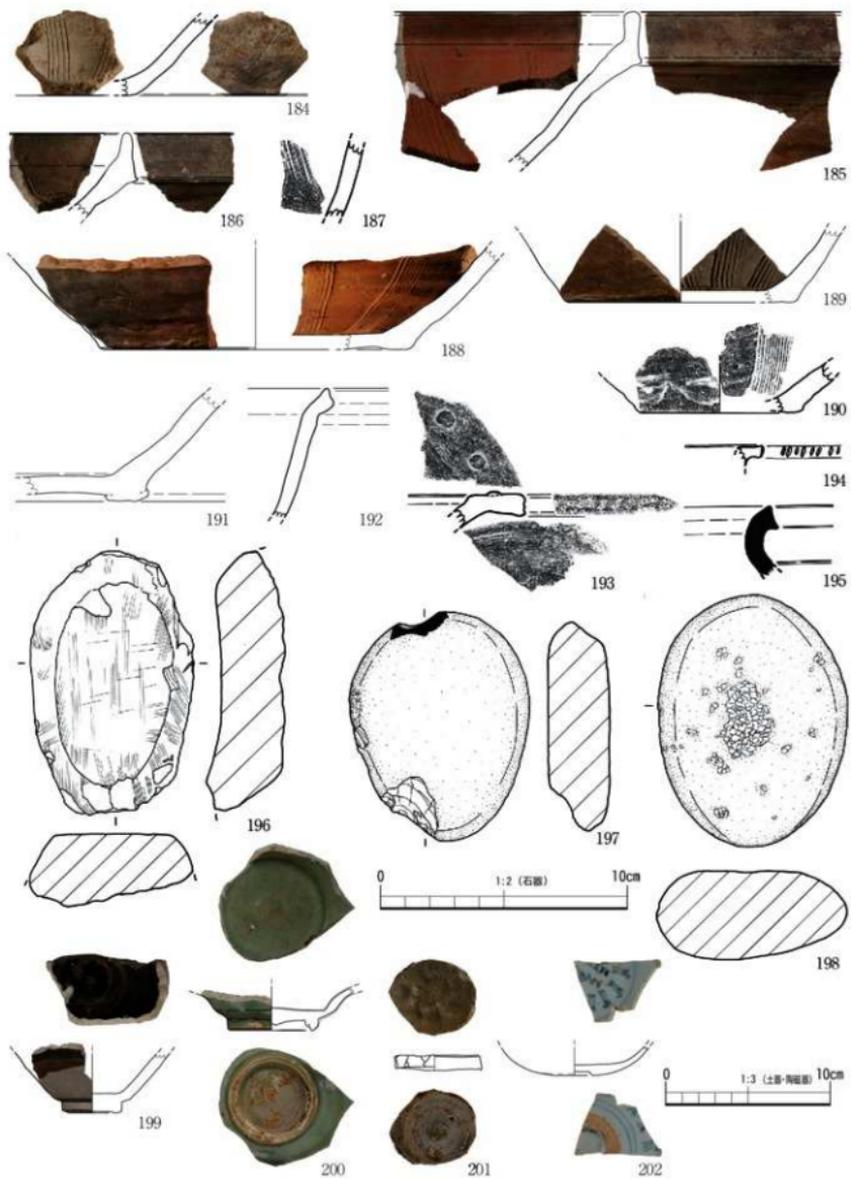
SC67は多くの弥生時代から古代の遺構を切っている。確認できた範囲では北西南東方向に



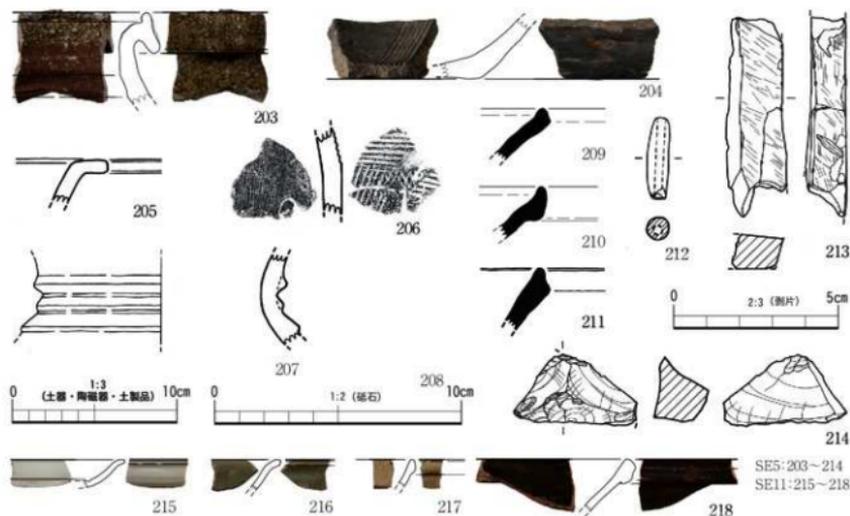
第28図 中世溝状遺構実測図 (S=1/100・1/50・1/40)



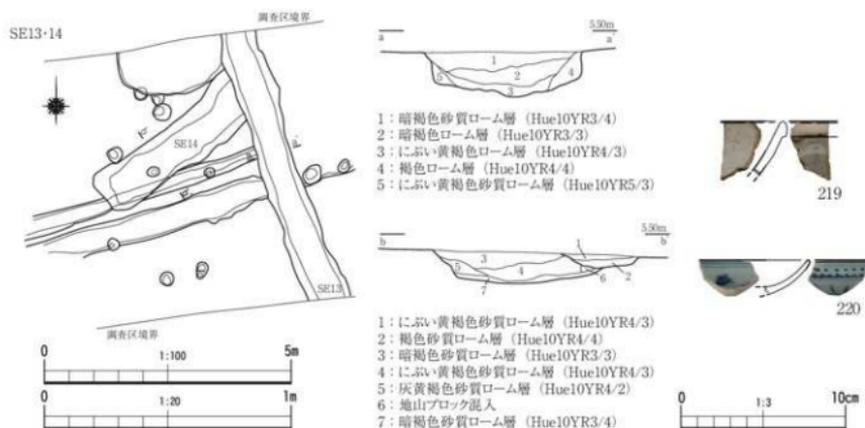
第29図 SE5 出土遺物実測図① (S=1/3)



第30图 SE5出土遺物実測図② (S=1/3・1/2)



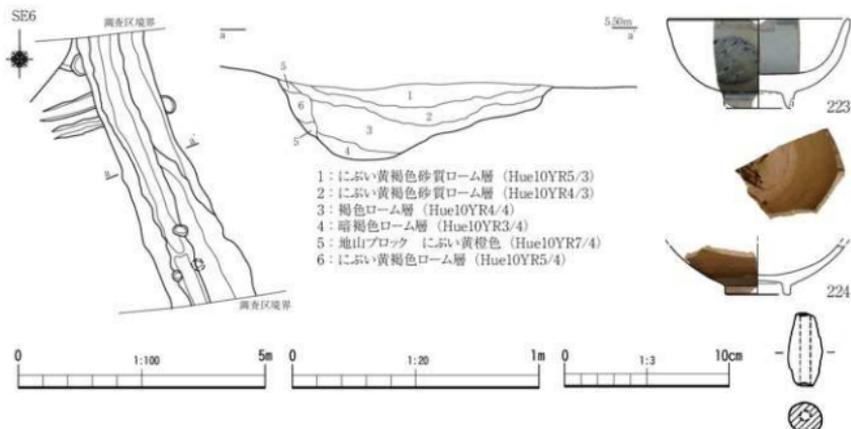
第31図 SE5・SE11出土遺物実測図 (S=1/3・2/3・1/2)



第32図 中世溝状遺構 (S=1/100・1/20) 及び出土遺物 (S=1/3) 実測図①

2.44m、北東南西方向に0.84mの不整長楕円形プランを呈する。南西方向には緩やかな段が見られる。遺構埋土からは青磁片 (152)、弥生土器片 (153) が出土している。

SC71とSC74は東西方向に並列しており、両者共に北側は調査区外に延びる。切り合い関係は不明で、両者は同時に掘削を行ったので埋土中の遺物は混在している。掘削後は常に湧水しており、土層観察ができなかった。確認できた範囲ではSC71は東西方向に0.64m、南北方



第34図 近世溝状遺構 (S=1/100・1/20) 及び出土遺物 (S=1/3) 実測図

溝状遺構 (SE1～3・5・11・13・14・22～24・29・6)

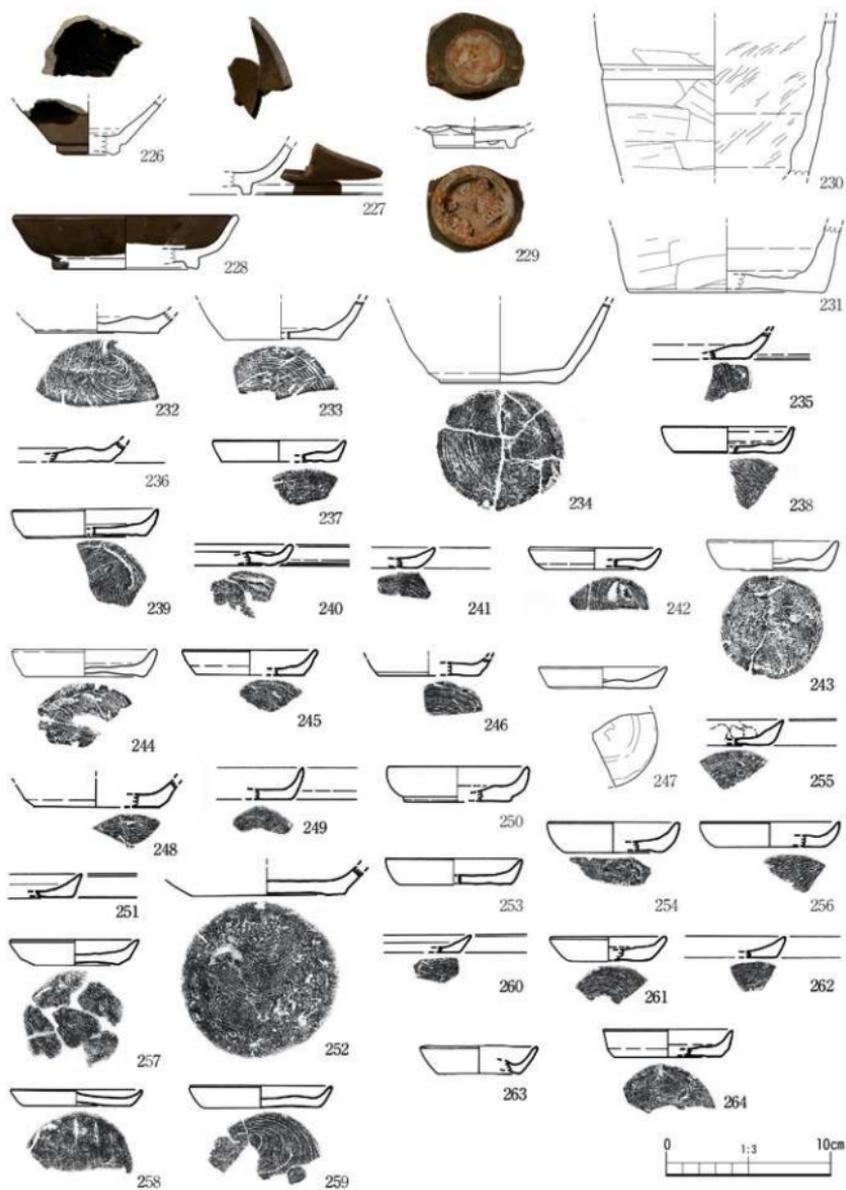
SE1・2は北西南東方向に並列し、北東南西方向へ方線を向ける。土層観察からSE1の方が新しいことが確認された。SE3はそれに直交するがSE1・2と別遺構なのか、どちらかがカーブしたものなのかは不明である。確認できた範囲ではSE1は長さ23.6mで幅は0.3m～0.7m、検出面からの深さは0.2mの皿状の断面形を呈する。SE2は幅0.6m～0.8mで検出面からの深さは0.1mの皿状の断面形を呈している。SE3は長さ2.6m、幅は0.7m～0.9mである。これらの遺構埋土からは中国産陶磁器片(159・164)、国産陶磁器片(160～163・165)の他に瓦片が多数出土しているが、こちらは図化には耐えなかった。

SE5は北側調査区から南側調査区にかけて北西南東方向に方線を向けて検出された。なお、北側も南側も調査区外に延びている。北側調査区の西側は並列するSE11に切られている。土層観察では複数回の掘り返しが確認され、幅2.2mの掘削が最大のものとなっている。掘削中から湧水が著しく、特に南側調査区では立ち上がり箇所が崩れることもあった。検出面からの深さは北側の最深で0.7mの碗状の断面形である。遺構埋土からは中国産陶磁器片(166～174・199～202)、国産陶器片(175～192・203～204・206)、弥生土器片(193・194・205・207・208)、須恵器片(195・209～211)、砥石(196・213)、石錘(197)、敲石(198)、土錘(212)、姫烏産黒曜石製剥片(214)のほか鉄滓、獣骨、土師器片が出土している。

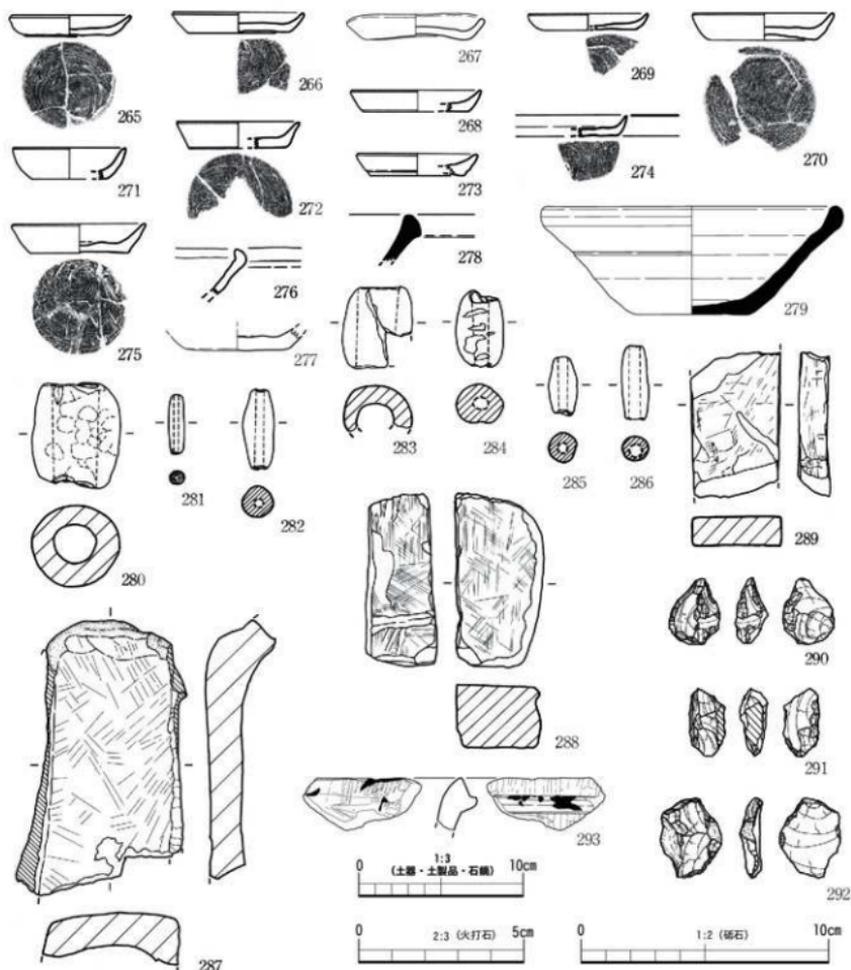
SE11は幅1.24mで検出面からの深さは0.32mの皿状の断面形を呈する。遺構埋土からは中国産陶磁器片(215～217)、国産陶器片(218)などが出土している。

SE13は南北方向に方線を向け、調査区外に延びている。確認できた範囲では長さは6m、幅は0.74m～0.87mで検出面からの深さは0.18mの箱型の断面形を呈する。遺構埋土からは中国産陶磁器片(219・220)の他に土師器片が出土したが、図化には耐えなかった。

SE14は南西側の端が溝状遺構と重なっており、北東南西方向に方線を向ける。その長さは3.37m、幅は1mで、検出面からの深さは0.15mの逆台形状の断面形を呈する。

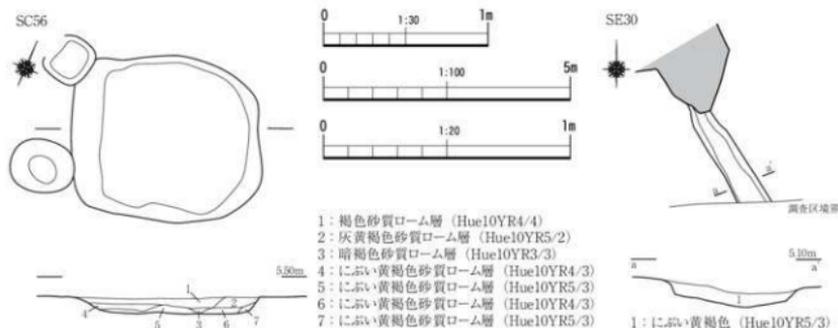


第 35 图 中世柱穴出土遺物実測図① (S=1/3)

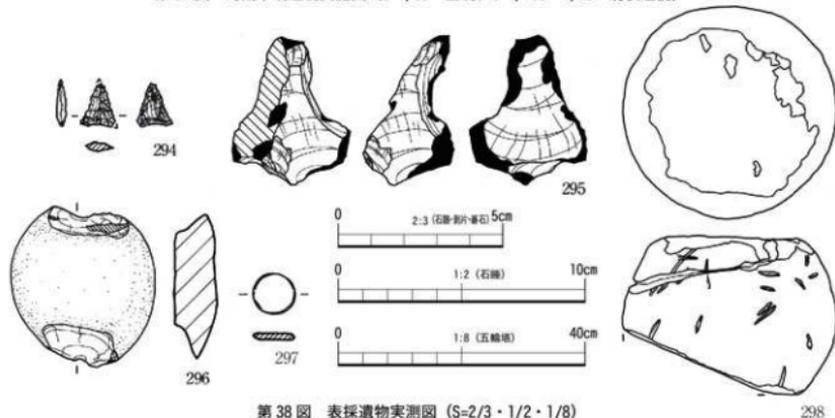


第36図 中世柱穴出土遺物実測図② (S=1/3・2/3・1/2)

SE22・23は中央調査区で検出された。南北方向に並列されており、東西方向に方線を向け、調査区外に延びている。また大部分が攪乱を受けている。確認できた範囲ではSE22は長さが3.3m、幅は0.6m～0.8mで検出面からの深さは0.24mのV字状の断面形を呈する。遺構埋土からは中国産の白磁片(221)、他に土師器片が出土したが、こちらは図化には耐えなかった。SE23は確認できた範囲では長さが3.3m、幅は1.1mで検出面からの深さは0.4mの逆台形状の断面形を呈する。遺構埋土からは土師器片、弥生土器片が出土したが図化には耐えなかった。



第37図 時期不明遺構実測図 (S=1/30:土坑、S=1/100・1/20:溝状遺構)



第38図 表採遺物実測図 (S=2/3・1/2・1/8)

SE24は北西南東方向に方線に向け、南東方向は調査区外に延びている。北西部は古墳時代のSC10と重なっている。確認できた範囲では長さは3m、幅は0.28m～0.77mで検出面からの深さは0.05mの皿状の断面形を呈する。遺構埋土からは陶器片(222)が出土している。

SE29は南側調査区で検出された。南北方向に方線をむけ、調査区外に延びている。中央付近で緩やかに屈曲する。確認できた範囲で長さは6m、幅は1.25m～1.73mで検出面からの深さは0.14mの皿状の断面形を呈する。遺構埋土からは中国産青磁片、須恵器片、土師器片が出土したが、図化には耐えなかった。

SE6は南北方向に方線に向け、調査区外に延びている。確認できた範囲では長さ6m、幅は1.25m～1.73mで検出面からの深さは0.29mの東側が緩やかに立ち上がる不整逆台形状の断面形を呈する。遺構埋土からは国産陶磁器片(223・224)、土製品(225)が出土した。

時期不明遺構・表採遺物

第37・38図にまとめている。注目すべきは294と295で、294はSE4の攪乱部分から、295はSE12の攪乱部分から出土したもので、弥生時代に帰属する可能性が高い。

第VI章 まとめ

宅地内の道路部分という限られた調査範囲の中であったが、弥生時代から近世まで多くの資料が検出された。特に資料がまとまった弥生時代、古墳時代、中世についてまとめる。

弥生時代の遺構と遺物について

SE12からは残存状況が悪いながらもまとまって弥生土器が出土した。それを概観すると、甕は直口する口縁部の下に刻目突帯を貼り付ける下城式系と口縁部の断面形が三角形か台形を呈して胴部に多くの突帯が付き、中実の脚台を呈する底部を持つ入来式系の2種類が見られる。これらは中期前半から中頃に取まると考えられ、本遺構から出土した打製石鏃や磨製石鏃、管玉の時期を決定させる。県内の弥生時代の石製管玉はこれまでは高千穂町古城遺跡の資料が中期末のもので最古であったが、本遺跡の資料はこれを遡るものとして注目される。

また今回出土した打製石鏃や石錐は帰属時期が明らかであることから、未だ不明瞭である本県の弥生時代の打製石器の使用状況を解明する手がかりの一つとなるといえる。

古墳時代の遺構と遺物について

古墳時代の遺構としては堅穴住居跡が検出されており、SA64から出土した須恵器はTK209段階のものと考えられる。SA69から出土した土師器も6世紀後半から7世紀初頭に取まるものであろう。またSX9やSC71・74から出土した古墳時代の出土遺物もこれらと概ね同時期のものである。この年代は本遺跡の近郊にある土器田横穴墓群や広瀬城ヶ峰横穴墓群の築造時期と重なっており、本遺跡の集落はこれらの墳墓群と関わった集団のものである可能性が考えられる。

中世の遺構と遺物について

中世の遺構としては4種の建物跡を含める大量の柱穴と溝状遺構、土坑が挙げられる。溝状遺構の内SE5は南側調査区から北側調査区まで延びていることが確認され、本来の地形が大きく削平されている状況でも幅が2mを超える規模のものであり、この溝状遺構の方線と直交する形で全ての建物跡が検出されている。このことから本遺跡はSE5に区画された中世の集落遺跡と位置づけることができるだろう。またSE5を挟んで東側では柱穴が大量に検出され、西側を見るとそれが少なくなっていることも注目される現象である。

中世の集落は出土遺物の種類や数量を見ると、東播磨系の須恵器、中国産の玉縁の白磁片や同安窯系青磁片から12世紀頃には開始され、龍泉窯系青磁、備前系陶器が目立つ14世紀後半から15世紀代にピークを向かえ、16世紀頃に終焉するような状況が想定される。

この時期に本遺跡のような河川の河口付近に大型の溝状遺構に区画され、中国産陶磁器を保有する集落跡としては新別府川河口付近にある池開・江口遺跡と八重川河口付近の下鶴遺跡が挙げられる。このような集落跡は宮崎平野部の中小河川沿いにまだ存在する可能性が考えられる。今後類例が増えることで、当時の村落の様子や流通なども解明されていくだろう。

なお、本遺跡はかつて「瓢箪島」とも呼ばれ、「西郷札」が作られた場所という伝承が残っているが、今回の調査ではその痕跡は確認できなかったことを最後に付け加えておく。

※紙面の都合上、引用・参考文献は割愛させていただきました。ご了承ください。

第1表 出土土器観察表①

出土地名	番号	遺物番号	種別	用途	形状	口径	高さ	底径	色	調子	産地	表面				備考	実測番号			
												外面	内面	A	B			C	D	
B. 11 新田	1	SC31	土器	---	---	---	---	---	にぶい-黄褐色	10197/3	良好	ハケ目	ナブ	ナブ	1	少	口唇部 平打ノズ 胎土 焼. 灰2mm/多	4		
	2	SC51	土器	---	---	---	---	---	にぶい-赤褐色	5195/4	良好	ナブ	ナブ	1	1多	口唇部 胎付突部にハケ目 胎土 灰. 焼2mm/多	8			
B. 12 新田	4	SC72	土器	---	---	---	---	---	にぶい-褐色	10197/1	良好	ナブ	凹輪	ナブ	1	少	凹輪文の新巻土を付ける 胎土 焼. 灰2mm/多	32		
	7	SE4 北	土器	---	(6.4)	---	---	---	焼灰	5194/1	良好	ナブ	ナブ	ナブ	3	多	底面 ナブ 胎土 焼. 灰2mm/多	124		
B. 13 新田	7	SE4 北	土器	---	---	---	---	---	にぶい-褐色	7.5195/3	良好	ナブ	ナブ	ナブ	1	少	口唇部 胎付突部 胎土 焼. 灰2mm/多	100		
	8	SE4 北	土器	---	---	---	---	---	にぶい-赤褐色	5195/6	良好	ナブ	沈輪	指押さえ	ナブ	1	3多	底面着色 胎土 焼. 灰2mm/多	39	
B. 14 新田	9	SE4 北	土器	---	(5.7)	---	---	---	にぶい-褐色	7.5195/4	良好	ナブ	ナブ	指押さえ	2	少	底面 ナブ 胎土 焼. 灰2mm/少	125		
	11	SE12	土器	---	---	---	---	---	褐色	7.5197/6	良好	ナブ	沈輪	胎付突部	2	少	胎土 焼. 灰2mm/多	40		
B. 15 新田	12	SE12	土器	---	---	---	---	---	にぶい-褐色	7.5196/4	良好	風化	ナブ	胎付突部	1	1少	口唇部 胎付突部 胎土 焼. 灰2mm/多	81		
	13	SE12	土器	---	---	---	---	---	にぶい-黄褐色	10196/3	やや良好	風化	ナブ	胎付突部	1	1多	口唇部 胎付突部 胎土 焼. 灰2mm/多	86		
B. 16 新田	14	SE12	土器	---	---	---	---	---	灰黄褐色	10196/2	良好	ナブ	胎付突部	風化	ナブ	2	少	口唇部 胎付突部 胎土 焼. 灰2mm/多	106	
	15	SE12	土器	---	---	---	---	---	にぶい-黄褐色	10197/3	良好	風化	風化	ナブ	1	多	口唇部 胎付突部 胎土 焼. 灰1mm/多	99		
B. 17 新田	16	SE12	土器	---	---	---	---	---	灰黄褐色	10195/2	良好	ナブ	ナブ	ナブ	1	少	口唇部 胎付突部 胎土 灰. 焼2mm/少	109		
	17	SE12	土器	---	---	---	---	---	にぶい-褐色	7.5196/3	良好	ナブ	ナブ	ナブ	3	1.5多	口唇部 胎付突部 胎土 焼. 灰2mm/多	101		
B. 18 新田	18	SE12	土器	---	---	---	---	---	にぶい-褐色	7.5196/4	良好	ナブ	工具ナブ	風化	ナブ	1	少	口唇部 胎付突部 胎土 焼. 灰2mm/多	103	
	19	SE12	土器	---	---	---	---	---	にぶい-黄褐色	10197/3	良好	ナブ	胎付突部	ナブ	ナブ	1	少	口唇部 胎付突部 沈輪 胎土 焼. 灰2mm/多	105	
B. 19 新田	20	SE12	土器	---	---	---	---	---	にぶい-赤褐色	5195/4	良好	ナブ	ナブ	ナブ	1	少	口唇部 胎付突部 胎土 焼. 灰2mm/多	116		
	21	SE12	土器	---	---	---	---	---	にぶい-赤褐色	5195/3	良好	ナブ	ナブ	ナブ	1	少	口唇部 胎付突部 胎土 灰. 焼2mm/多	108		
B. 20 新田	22	SE12	土器	---	---	---	---	---	にぶい-赤褐色	5194/3	良好	凹輪ナブ	凹輪ナブ	2	1多	口唇部 胎付突部 胎土 焼. 灰2mm/多	312			
	23	SE12	土器	---	---	---	---	---	にぶい-黄褐色	10196/2	良好	ナブ	ナブ	ナブ	2	少	胎土 灰. 焼1mm/多	114		
B. 21 新田	24	SE12	土器	---	---	---	---	---	にぶい-赤褐色	5194/3	良好	ナブ	ハケ目	ナブ	ナブ	1	少	胎土 焼. 灰2mm/多	113	
	25	SE12	土器	---	---	---	---	---	にぶい-褐色	7.5196/3	良好	ナブ	ナブ	ナブ	1	少	口唇部 胎付突部 胎土 焼. 灰2mm/多	111		
B. 22 新田	26	SE12	土器	---	---	---	---	---	にぶい-黄褐色	10195/3	良好	ナブ	竹管の刺突	ナブ	1.5	少	胎土 焼. 灰1mm/多	120		
	27	SE12	土器	---	---	---	---	---	にぶい-褐色	7.5196/4	良好	工具ナブの地割突文	ナブ	ナブ	1	少	胎土 焼. 灰2mm/多	121		
B. 23 新田	28	SE12	土器	---	---	---	---	---	焼灰	5194/1	良好	輪文に上る刺突文	沈輪	ナブ	1	少	胎土 焼. 灰1mm/少	122		
	29	SE12	土器	---	---	---	---	---	にぶい-黄褐色	10196/3	良好	胎付突部にキズ目	ナブ	ナブ	1	1多	外面 スズ付 凹輪部ナブ 胎土 焼. 灰2mm/少	90		
B. 24 新田	30	SE12	土器	---	---	---	---	---	にぶい-褐色	7.5196/2	良好	胎付突部にキズ目	風化	ナブ	3	1少	胎土 焼. 灰2mm/多	50		
	31	SE12	土器	---	---	---	---	---	にぶい-赤褐色	5195/4	良好	ナブ	ナブ	突部	1	1多	胎土 焼. 灰2mm/多	102		
B. 25 新田	32	SE12	土器	---	8.1	---	---	---	にぶい-褐色	7.5196/1	良好	ナブ	ナブ	ナブ	2	多	底面 ナブ 胎土 焼. 灰2mm/多	126		
	33	SE12	土器	---	6.9	---	---	---	にぶい-赤褐色	7.5196/4	良好	ナブ	ナブ	ナブ	2	多	底面 ナブ 胎土 焼. 灰2mm/多	127		
B. 26 新田	34	SE12	土器	---	7.2	---	---	---	にぶい-黄褐色	10196/3	---	良好	ナブ	---	1	少	底面 ナブ 胎土 焼. 灰2mm/多	129		
	35	SE12	土器	---	6.6	---	---	---	にぶい-赤褐色	5195/4	---	良好	工具ナブ	---	1	少	底面 ナブ 胎土 焼. 灰2mm/多	128		
B. 27 新田	36	SE12	土器	---	6.8	---	---	---	にぶい-赤褐色	5195/4	良好	ナブ	ナブ	ナブ	1	少	外面 黄褐色 底面 ナブ 胎土 灰. 焼2mm/少	130		
	52	SC31	土器	---	---	---	---	---	焼灰	灰黄褐色	10197/2	良好	胎付突部にキズ目	ナブ	1	少	胎土 焼. 灰1mm/少	107		
B. 28 新田	53	SE41	土器	---	---	---	---	---	灰	5194/2	良好	凹輪ナブ	ナブ	凹輪ナブ	ナブ	1	少	胎土 灰1mm/ 家床土	298	
	54	SH803	土器	---	---	---	---	---	にぶい-赤褐色	5195/4	良好	風化	ナブ	風化	ナブ	1	少	胎土 焼. 灰2mm/多	6	
B. 29 新田	55	SH902	土器	---	---	---	---	---	にぶい-褐色	7.5195/3	良好	風化	ナブ	風化	ナブ	1	1少	胎土 焼. 灰2mm/多	7	
	56	SH870	土器	---	---	---	---	---	にぶい-褐色	7.5196/2	良好	ナブ	ナブ	ナブ	1	少	口唇部 胎付突部 胎土 灰. 焼2mm/多	119		
B. 30 新田	57	SH800	土器	---	---	---	---	---	にぶい-黄褐色	10194/3	良好	胎付突部	ナブ	風化	ナブ	1	1多	胎土 灰. 焼2mm/多	3	
	58	SH809	土器	---	---	---	---	---	にぶい-黄褐色	10196/3	良好	風化	ナブ	胎付突部	ナブ	1	1少	胎土 焼. 灰2mm/多	11	
B. 31 新田	59	SH2056	土器	---	---	---	---	---	にぶい-赤褐色	5195/3	良好	風化	ナブ	胎付突部	風化	ナブ	1	1少	胎土 焼. 灰2mm/多	20
	60	SH8001	土器	---	---	---	---	---	にぶい-黄褐色	10197/2	良好	ナブ	ハケ目	胎付突部	ナブ	1	1少	口唇部 凹輪の沈輪 胎土 焼. 灰2mm/多	14	
B. 32 新田	61	SH8101	土器	---	---	---	---	---	にぶい-褐色	7.5196/4	良好	ナブ	ハケ目	風化	ナブ	1	少	口唇部 突部にキズ目 胎土 突. 焼. 灰1mm/多	17	
	62	SH8114	土器	---	---	---	---	---	にぶい-赤褐色	5195/4	良好	風化	ナブ	風化	ナブ	1	2多	口唇部 胎付突部 胎土 焼. 灰2mm/多	18	
B. 33 新田	63	SH2029	土器	---	---	---	---	---	灰黄褐色	10197/3	良好	ナブ	ナブ	風化	ナブ	1	1少	胎土 焼. 灰2mm/多	16	
	64	SH45	土器	---	(5.9)	---	---	---	灰黄褐色	7.5194/3	良好	ナブ	ナブ	ナブ	1	1多	底面 ナブ 胎土 焼. 灰2mm/多	3		
B. 34 新田	65	SH808	土器	---	---	---	---	---	褐色	5196/6	良好	ナブ	指押さえ	ナブ	1	1少	底面 ナブ 胎土 焼. 灰2mm/多	9		

胎土: A:宮崎小石・長石・石英・角閃石・角閃石・角閃石・角閃石

第3表 出土土器観察表③

北条百景番号	番号	遺跡名	種別	形状	口径	高さ	底径	色		構成	胎土			備考	実測番号		
								外面	内面		A	B	C				
p. 27 第124図	123	S8118	土師器	皿	-	-	1.32	にぶい黄褐色 10196/3	10196/3	良好	同輪ナツ	同輪ナツ	1	1	底面 同輪へら切り 胎土 焼1mm/少	88	
	124	S8195	土師器	皿	-	-	-	焼灰 7.5194/1	2.5195/2	やや良好	同輪ナツ	同輪ナツ	1	1	底面 同輪へら切り 胎土 焼1mm/少	20	
	125	S8227	土師器	皿	(7.0)	(5.0)	1.1	にぶい黄褐色 10197/3	にぶい黄褐色 10196/3	やや良好	同輪ナツ	黒化 同輪ナツ	1	1	底面 同輪へら切り残ナツ	62	
	126	S8734	土師器	皿	(8.1)	(6.9)	1.3	にぶい黄褐色 10197/3	にぶい黄褐色 10196/3	やや良好	同輪ナツ	黒化	1	1	底面 同輪へら起こし	72	
	127	S8873	土師器	皿	(7.0)	(5.0)	1.25	にぶい黄褐色 7.5196/2	にぶい黄褐色 7.5196/4	良好	同輪ナツ	同輪ナツ	1	1	底面 同輪へら切り	61	
	128	S8974	土師器	皿	(7.0)	(6.0)	1.2	にぶい黄褐色 10196/3	にぶい黄褐色 10196/3	やや良好	同輪ナツ	同輪ナツ	1	1	底面 同輪へら切り 胎土 焼2mm/少	51	
	129	S8993	土師器	皿	(7.0)	5.4	1.7	にぶい黄褐色 7.5196/2	焼灰 7.5196/4	やや良好	同輪ナツ	同輪ナツ	1	1	底面 同輪へら切り	26	
	130	S8996	土師器	皿	(8.3)	(6.0)	1.0	にぶい黄褐色 7.5196/4	にぶい黄褐色 7.5196/4	良好	同輪ナツ	同輪ナツ	1	1	底面 同輪へら切り 胎土 焼1mm/多	45	
	131	S8998	土師器	皿	7.6	6.1	1.4	にぶい黄褐色 7.5196/4	にぶい黄褐色 7.5196/4	良好	同輪ナツ	同輪ナツ	1	1	底面 同輪へら切り 胎土 焼1.5mm/少	22	
	132	S8998	土師器	皿	(6.0)	(7.3)	1.4	にぶい黄褐色 10196/3	にぶい黄褐色 2.5195/3	良好	同輪ナツ	同輪ナツ	1	1	底面 同輪へら切り 胎土 焼1mm/多	90	
	133	S81252	土師器	皿	-	-	1.05	にぶい黄褐色 7.5196/4	にぶい黄褐色 7.5196/3	良好	同輪ナツ	同輪ナツ	1	1	底面 同輪へら切り 胎土 焼1mm/少	93	
	134	S8553	土師器	皿	(7.0)	-	-	焼 5197/6	5197/6	良好	同輪ナツ	同輪ナツ	1	1	底面 同輪へら切り 胎土 焼1mm/少	296	
	135	S8535	土師器	皿	-	6.1	-	黄褐色 7.5198/4	黄褐色 7.5198/4	良好	同輪ナツ	黒化	1	1	底面 同輪へら切り 胎土 焼2mm/少	282	
	136	S854	土師器	皿	-	-	-	焼灰 7.5197/1	焼赤灰 1084/1	良好	同輪ナツ	同輪ナツ	1	1	底面 同輪へら切り 胎土 焼1mm/多	25	
	p. 30 第230図	137	S8560	土師器	皿	-	-	1.5	焼 7.5197/6	7.5197/6	良好	ナツ	ナツ	1	1	底面 黒化 ナツ 胎土 焼1mm/少	63
		138	S8560	土師器	皿	-	-	-	焼灰 7.5197/2	にぶい黄褐色 7.5196/4	やや良好	ナツ	ナツ	1	1	外周 スス付着 胎土 焼1mm/多	60
		140	S8661	土師器	片蓋	-	-	-	焼灰 10195/1	焼灰 10195/1	良好	同輪へらナツリ 及ナツ	同輪ナツ	1	1	自然釉	23
142		S8641	土師器	皿	(6.0)	-	-	にぶい黄褐色 7.5196/2	にぶい黄褐色 7.5196/2	良好	同輪ナツ	同輪ナツ	1	1	底面 同輪へら切り 胎土 焼1mm/少	281	
143		S8641	土師器	皿	-	8.0	-	にぶい黄褐色 7.5197/4	にぶい黄褐色 7.5197/4	良好	同輪ナツ	ナツ	1	1	底面 同輪へら切り 胎土 焼2mm/少	295	
144		S82866	土師器	皿	-	-	1.4	にぶい黄褐色 7.5197/3	にぶい黄褐色 7.5196/4	良好	同輪ナツ	同輪ナツ	1	1	底面 同輪へら切り 胎土 焼6mm/少	91	
146		SC28	土師器	皿	(6.0)	-	-	にぶい黄褐色 7.5197/4	にぶい黄褐色 7.5196/3	良好	同輪ナツ	同輪ナツ	1	1	底面 同輪へら切り	43	
147		SC42	土師器	皿	-	-	-	灰白 2.517/1	灰白 2.517/1	良好	同輪ナツ	同輪ナツ	1	1	胎土 灰 焼3mm/多 底面 素	253	
151		SC66	土師器	皿	-	-	-	灰白 7.5198/1	灰白 2.5194/1	良好	ナツ	ナツ	1	1	下部灰付着 胎土 焼2mm/少	131	
153		SC67	土師器	皿	-	5.4	-	にぶい黄褐色 7.5195/3	にぶい黄褐色 10196/3	良好	ナツ	ナツ	1	1	底面 ナツ 胎土 焼2mm/多	123	
p. 33 第262図	154	SC71-74	土師器	皿	-	-	-	灰白 2.517/1	灰白 1.517/1	良好	同輪ナツ	同輪ナツ	1	1	胎土 灰 焼3mm/多 東縁素	249	
	155	SC71-74	土師器	皿	(7.0)	-	-	にぶい黄褐色 7.5196/4	にぶい黄褐色 5196/4	良好	黒化 ナツ	黒化 ナツ	1	1	底面 同輪へら切り	34	
	156	SC71-74	土師器	皿	-	-	-	にぶい黄褐色 7.5196/4	にぶい黄褐色 2.5196/4	良好	ナツ	ナツ	1	1	胎土 焼1mm/多	261	
	157	SC71-74	土師器	皿	(17.0)	-	-	焼 7.5196/6	焼 7.5196/6	良好	ナツ	ナツ	1	1	胎土 焼1mm/多	260	
	158	SC89	土師器	皿	-	-	-	黄褐色 2.5196/2	灰 5197/1	やや良好	同輪ナツ	同輪ナツ	1	1	胎土 焼1mm/少	33	
	159	SC89	土師器	皿	-	-	-	灰 5197/1	灰 5197/1	良好	ナツ	ナツ	1	1	胎土 焼1mm/少	116	
p. 37 第300図	194	SC5-2	土師器	皿	-	-	-	灰 5194/2	にぶい赤褐色 5195/4	良好	ナツ	ナツ	1	1	胎土 焼4mm/少	115	
	195	SC5-2	土師器	皿	-	-	-	にぶい黄褐色 10196/3	にぶい黄褐色 7.5197/4	良好	ナツ	ナツ	1	1	胎土 焼4mm/少	116	
	195	SC5-2	土師器	皿	-	-	-	灰 KS 1017/1	灰 1017/1	良好	同輪ナツ	同輪ナツ	1	1	自然釉	27	
p. 38 第311図	205	SC5-2	土師器	皿	-	-	-	灰 KS 1017/1	灰 1017/1	良好	ナツ	ナツ	1	1	胎土 灰 焼3mm/多	104	
	206	SC5-2	土師器	皿	-	-	-	焼赤灰 5194/2	灰 5194/2	良好	ナツ	ナツ	1	1	外周 スス付着	22	
	207	SC5-2	土師器	皿	-	-	-	灰 5194/2	にぶい赤褐色 5195/3	良好	ナツ	胎付茶目	2	1	胎土 灰 焼2mm/少	48	
	208	SC5-2	土師器	皿	-	-	-	焼 5196/6	焼 5196/6	良好	不明	不明	1	1	胎土 焼1mm/多	277	
	209	SC5-2	土師器	皿	-	-	-	灰 56	灰 56	良好	同輪ナツ	同輪ナツ	1	1	胎土 灰 焼1mm/少 東縁素	254	
	210	SC5-2	土師器	皿	-	-	-	灰白 517/1	灰白 517/1	良好	同輪ナツ	同輪ナツ	1	1	口縁部外周自然釉	255	
	211	SC5-2	土師器	皿	-	-	-	灰 56	灰 56	良好	ナツ	ナツ	1	1	胎土 焼1mm/少	280	
p. 41 第324図	212	SC5-2	土師器	皿	4.9 最大長	1.3 最大幅	1.4 厚さ	赤灰 2.585/1	赤灰 2.585/1	良好	ナツ	ナツ	1	1	胎土 灰 焼1mm/少	132	
	225	SC6	土師器	皿	4.1 最大長	2.0 最大幅	1.75 厚さ	黄灰 2.519/1	黄灰 2.519/1	良好	ナツ	ナツ	1	1	胎土 焼 灰 焼1mm/多	133	
	232	S8467	土師器	皿	(7.4)	-	-	にぶい黄褐色 7.5197/4	にぶい黄褐色 7.5197/4	良好	同輪ナツ	同輪ナツ	1	1	底面 同輪へら切り 胎土 焼2mm/少	283	
	233	SC8237	土師器	皿	(6.9)	-	-	焼 7.5197/6	7.5197/6	良好	同輪ナツ	同輪ナツ	1	1	底面 同輪へら切り 胎土 焼1mm/少	289	
	234	S82242 SC8248	土師器	皿	-	7.1	-	にぶい黄褐色 5196/4	にぶい赤褐色 5196/4	良好	同輪ナツ	同輪ナツ ナツ	1	1	底面 同輪へら切り 胎土 灰 白1mm/少	288	
	235	S884	土師器	皿	-	-	-	にぶい黄褐色 7.5196/4	にぶい赤褐色 5195/3	良好	同輪ナツ	同輪ナツ	1	1	底面 同輪へら切り 胎土 焼1mm/少	294	
	236	S8466	土師器	皿	-	-	-	焼 2.5195/6	明赤褐色 2.5195/6	良好	同輪ナツ	同輪ナツ	1	1	底面 同輪へら切り 胎土 焼1mm/少	82	
	237	S883	土師器	皿	(7.9)	(7.0)	1.3	焼 7.5197/6	にぶい赤褐色 5197/4	良好	同輪ナツ	同輪ナツ	1	1	底面 黒化 胎土 焼1mm/少	69	
	238	S883	土師器	皿	(7.0)	(6.4)	1.0	にぶい黄褐色 5196/4	にぶい黄褐色 5196/4	良好	同輪ナツ	同輪ナツ	1	1	底面 同輪へら切り	81	

中胎土 A:官崎小石 B:長石 C:石英 D:輝石 E:雲母 F:黒炭

第4表 出土土器観察表④

調査番号	遺構番号	種別	用途	寸法(mm)		重量(g)	色		調子	焼成	表面		加工		備考	調査番号	
				口径	高さ		外面	内面			A	B	C	D			
239	S0103	土器	皿	—	—	—	にじみ焼 5.035/3	にじみ焼 5.035/4	良好	同軸ナズ	同軸ナズ	—	—	—	底面 同軸未切り	21	
240	S0171	土器	皿	—	—	1.25	にじみ焼 7.5305/3	にじみ焼 7.5305/3	良好	同軸ナズ	同軸ナズ	1	少	—	底面 同軸未切り 軸上 焼. 灰. 1mm/少	54	
241	S0300	土器	皿	—	—	1.28	にじみ焼 10.936/3	にじみ焼 10.936/3	良好	同軸ナズ	同軸ナズ	1	少	—	底面 同軸未切り 軸上 焼. 灰. 1mm/少	68	
242	S0407	土器	皿	7.8	6.0	1.3	にじみ焼 7.5306/4	にじみ焼 7.5305/3	良好	同軸ナズ	同軸ナズ	数	数	—	底面 同軸未切り	35	
243	S0407	土器	皿	7.8	6.2	1.9	硬 5.037/6	硬 5.037/6	良好	同軸ナズ	同軸ナズ	数	数	—	底面 同軸未切り 軸上 焼. 灰. 1mm/少	285	
244	S0407	土器	皿	8.6	7.2	1.7	硬 5.037/6	硬 5.037/6	良好	同軸ナズ	同軸ナズ	数	少	—	底面 同軸未切り 軸上 灰. 1mm/少	284	
245	S0402	土器	皿	8.0	6.0	1.5	にじみ焼 7.5305/4	にじみ焼 7.5305/4	良好	同軸ナズ	同軸ナズ	1	少	—	底面 同軸未切り 軸上 焼. 灰. 1mm/少	60	
246	S0471	土器	皿	—	—	0.1	にじみ焼 10.937/4	にじみ焼 10.937/3	良好	同軸ナズ	酸化 同軸ナズ	1	数	—	底面 同軸未切り 軸上 焼. 灰. 1mm/少	67	
247	S0472	土器	皿	7.7	6.0	1.3	改良焼 7.5306/4	改良焼 7.5306/4	良好	ナズ	ナズ	1	数	—	底面 同軸未切り 軸上 焼. 灰. 2mm/少	294	
248	S0487	土器	皿	—	—	0.7	硬 5.036/6	硬 5.036/6	良好	同軸ナズ	同軸ナズ	1	多	1	底面 酸化 ナズ	64	
249	S0503	土器	皿	—	—	1.95	硬 5.036/6	硬 5.036/6	良好	酸化	酸化	1	数	—	底面 同軸未切り	57	
250	S0526	土器	皿	8.4	6.4	2.1	硬赤焼 5.035/6	硬赤焼 7.5306/6	良好	同軸ナズ	同軸ナズ	1	少	—	底面 酸化	55	
251	S0554	土器	皿	—	—	1.45	にじみ焼 7.5305/4	にじみ焼 5.036/4	良好	ナズ	同軸ナズ	1	数	—	底面 ナズ 軸上 焼. 灰. 1mm/少	89	
252	S0719	土器	皿	—	—	0.3	灰赤 2.537/2	灰白 灰白	不良	同軸ナズ	ナズ	1	少	—	底面 同軸未切り 軸上 灰. 2mm/少	77	
253	S0721	土器	皿	8.2	6.8	1.6	硬赤焼 2.5305/6	硬赤焼 2.5305/6	良好	酸化	酸化	1	1	—	底面 酸化 酸化ナズ 軸上 焼. 灰. 1mm/少	53	
254	S0732	土器	皿	3.8	5.8	1.85	にじみ焼 5.036/3	にじみ焼 5.035/3	良好	同軸ナズ	同軸ナズ	数	数	—	底面 同軸未切り	19	
255	S0755	土器	皿	—	—	1.55	灰焼 7.5304/2	灰焼 7.5305/2	良好	同軸ナズ	同軸ナズ	1	多	—	底面 同軸未切り 軸上 焼. 灰. 1mm/少	86	
256	S0807	土器	皿	8.4	6.0	1.5	にじみ焼 7.5306/4	にじみ焼 5.035/4	良好	酸化 同軸ナズ	同軸ナズ	1	1	1	—	底面 同軸未切り 軸上 焼. 灰. 2mm/少	50
257	S0749	土器	皿	7.75	5.0	1.55	にじみ赤焼 5.035/4	にじみ赤焼 5.035/4	良好	酸化 同軸ナズ	同軸ナズ	1	1	—	底面 ナズ	74	
258	S0794	土器	皿	7.9	6.4	1.0	にじみ黄焼 10.936/3	にじみ黄焼 7.5306/4	中々良好	酸化	酸化 同軸ナズ	1	少	—	底面 酸化 ナズ 軸上 焼. 灰. 2mm/少	71	
259	S0799	土器	皿	8.6	7.0	1.4	灰焼 5.035/2	灰焼 7.5305/2	中々良好	同軸ナズ	同軸ナズ	1	多	1	—	底面 同軸未切り	73
260	S0828	土器	皿	—	—	1.1	にじみ焼 7.5306/3	にじみ焼 7.5306/3	良好	同軸ナズ	同軸ナズ	1	少	—	底面 同軸未切り 軸上 焼. 灰. 1mm/少	87	
261	S0851	土器	皿	7.0	5.0	1.5	にじみ焼 7.5305/4	にじみ焼 7.5306/4	良好	同軸ナズ	同軸ナズ	1	1	—	底面 同軸未切り 軸上 焼. 灰. 1mm/少	52	
262	S0874	土器	皿	—	—	1.3	にじみ焼 5.036/4	にじみ焼 7.5306/4	良好	同軸ナズ	同軸ナズ	1	少	—	底面 同軸未切り 軸上 焼. 灰. 1mm/少	83	
263	S0876	土器	皿	7.7	5.3	2.1	硬 5.036/6	硬 5.036/6	良好	ナズ	ナズ	1	多	—	底面 ナズ 軸上 焼. 灰. 1mm/少	38	
264	S0883	土器	皿	7.8	6.4	1.65	灰焼 7.5304/2	灰焼 5.036/4	中々良好	同軸ナズ	同軸ナズ	1	多	1	—	底面 同軸未切り 軸上 焼. 灰. 1mm/少	75
265	S0895	土器	皿	7.25	3.1	1.3	にじみ焼 5.036/4	焼灰 7.5305/1	中々良好	同軸ナズ	同軸ナズ	1	少	1	—	底面 不明 軸上 焼. 灰. 1mm/少	70
266	S0896	土器	皿	7.9	6.0	1.2	にじみ焼 7.5305/4	にじみ焼 5.036/4	良好	酸化 同軸ナズ	酸化 同軸ナズ	1	少	1	—	底面 同軸未切り	58
267	S0910	土器	皿	8.2	6.9	1.6	硬 5.037/6	硬 5.037/6	良好	同軸ナズ	同軸ナズ ナズ	数	多	—	底面 同軸未切り 軸上 焼. 灰. 1mm/少	293	
268	S0204	土器	皿	7.8	6.3	1.3	灰赤 2.537/2	灰赤 2.537/2	良好	同軸ナズ	同軸ナズ	1	数	—	底面 不明 軸上 焼. 灰. 1mm/少	85	
269	S02231	土器	皿	7.2	5.6	1.0	にじみ焼 10.935/3	にじみ焼 7.5306/4	中々良好	酸化	酸化	1	数	—	底面 同軸未切り 軸上 焼. 灰. 1mm/少	65	
270	S02232	土器	皿	8.4	6.3	1.7	にじみ焼 7.5307/3	にじみ焼 7.5307/4	良好	同軸ナズ	同軸ナズ	1	数	—	底面 同軸未切り	47	
271	S02232	土器	皿	6.8	5.0	1.9	灰赤焼 10.936/2	にじみ焼 7.5305/3	中々良好	酸化	酸化	1	少	1	—	底面 酸化	54
272	S02237	土器	皿	7.4	5.8	1.6	にじみ焼 7.5306/4	にじみ焼 7.5306/3	良好	同軸ナズ	同軸ナズ	1	多	1	—	底面 同軸未切り 軸上 焼. 灰. 1mm/少	44
273	S02293	土器	皿	7.1	5.7	1.3	にじみ焼 7.5306/3	にじみ焼 10.936/3	良好	同軸ナズ	同軸ナズ	1	少	—	軸上 焼. 灰. 1mm/少	90	
274	S02295	土器	皿	—	—	1.25	にじみ焼 5.035/4	にじみ焼 5.035/4	良好	同軸ナズ	同軸ナズ	1	少	—	底面 同軸未切り 軸上 焼. 灰. 1mm/少	92	
275	S02237	土器	皿	7.9	5.8	1.85	にじみ焼 7.5306/4	にじみ焼 7.5306/3	良好	同軸ナズ	同軸ナズ	数	数	—	底面 同軸未切り 軸上 焼. 灰. 1mm/多	36	
276	S0881	土器	皿	—	—	—	灰赤焼 10.935/3	にじみ焼 7.5306/3	良好	酸化	ナズ	1	多	—	軸上 灰. 2mm/多	13	
277	S02105	土器	皿	—	—	6.4	硬赤焼 2.537/2	硬 2.5306/6	良好	酸化	酸化	1	多	—	底面 酸化 軸上 焼. 灰. 1mm/少	292	
278	S0474	土器	皿	—	—	—	灰 10.937/1	灰 5.036/2	中々良好	同軸ナズ	同軸ナズ	1	多	—	底面 不明	26	
279	S0792	土器	皿	11.5	6.8	6.6	硬白 2.537/1	硬白 2.539/1	良好	同軸ナズ	同軸ナズ	1	多	—	軸上 灰. 白. 2mm/少 灰. 2mm/多	279	
280	S0315	土器	土	6.45	5.3	5.0	硬焼 7.5303/1	—	良好	ナズ	—	1	少	—	軸上 焼. 灰. 1mm/少	139	
281	S0308	土器	土	2.4	0.9	0.8	灰 N4	—	良好	ナズ	—	数	数	—	—	134	
282	S0704	土器	土	4.8	1.9	1.9	にじみ焼 2.536/4	—	良好	ナズ	—	1	少	—	軸上 焼. 灰. 1mm/僅	133	
283	S0843	土器	土	4.1	2.8	2.8	灰 N4	硬灰 N3	良好	ナズ	ナズ	数	数	—	—	138	
284	S0891	土器	土	4.6	2.85	2.4	にじみ焼 7.5305/3	—	良好	ナズ	—	数	少	—	軸上 焼. 灰. 1mm/少	137	
285	S0891	土器	土	3.6	1.68	1.7	にじみ焼 2.536/3	—	良好	ナズ	—	数	数	—	軸上 焼. 灰. 1mm/僅	140	
286	S02105	土器	土	4.9	1.3	1.4	灰赤焼 10.936/2	—	良好	ナズ	—	数	数	—	軸上 焼. 灰. 1mm/僅	136	

軸動上: A: 宮崎小石 B: 長石 C: 石英 D: 輝石 E: 角閃石 F: 雲母

第5表 出土陶磁器・石製品観察表

掲載頁 図番号	番号	遺構等	種別	器種	法量m (): 次元			産地	時期	備考	実測 番号
					口径	底径	器高				
p. 26 第29図	108	SH321・SX9	白磁	碗	—	—	—	中国	13C中～14C前		214
	109	SX9	青磁	碗	—	—	—	中国龍泉窯系	13C中～14C前	漆字文	217
	110	SX9	陶器	椀鉢	—	—	—	備前	15C中～末		246
p. 30 第29図	116	SX9	陶器	不明	—	(9, 2)	—	—	—	外面横刻内に自然蝕 火燃れで変形 須恵質?	258
	139	SH741	青磁	碗	—	—	—	中国龍泉窯系	15C後～16C前	漆字文	213
p. 33第26図	141	SH2132	青磁	碗	—	—	—	中国	14C		215
	145	SC27・SC28	青磁	碗	—	—	—	中国	14C	ヘラケズリ痕	208
p. 32 第26図	148	SC39	青磁	碗	—	—	—	中国龍泉窯系	15C後～16C前		210
	149	SC38・39Tr	青磁	皿	—	(5, 0)	—	中国龍泉窯系	15C		209
p. 33第26図	150	SC54	青花	坪	—	—	—	中国	15C代	團扇 花 口縁端部に鉄軸がまわる	211
	152	SO7	青磁	碗	—	—	—	中国龍泉窯系	15C後～16C前	漆字文	212
	159	SE1	青花	碗	—	(4, 0)	—	中国	15C後～16C前	不明文様 團扇 基筋底	201
	160	SE1	磁器	染付碗	—	(4, 2)	—	中国	18C後	團扇 外面に不明文様	199
	161	SE1	陶器	椀鉢	—	—	—	九州?	—		244
	162	SE2	青花	端反碗	—	—	—	瀬戸美濃	19C	不明文様 團扇	202
	163	SE1・2	陶器	椀鉢	—	—	—	備前	15C後		245
	164	SE3	白磁	皿	—	(6, 2)	—	中国	16C?		206
	165	SE3	陶器	鉢	—	(8, 0)	—	—	—	外面にスス付着 円盤に転用?	207
	166	SE5 北	青磁	碗	(14, 1)	—	—	中国龍泉窯系	14C中～15C前	雷文漆字文	187
p. 36 第29図	167	SE5	青磁	碗	—	—	—	中国龍泉窯系	15C後～16C前	漆字文	189
	168	SE5 北	青磁	碗	—	4.4	—	中国龍泉窯系	14C後～15C前	スタンプ文	183
	169	SE5 北	青磁	碗	—	(5, 0)	—	中国龍泉窯系	15C代	底面 付着物有り	185
	170	SE5 北	白磁	碗	—	4.4	—	中国	14C～15C前	打ち欠き? 円盤? ピロースクタイプ?	184
	171	SE5 北	青磁	坪	(12, 6)	5.3	3.9	中国龍泉窯系	14C前	麻痺弁文 スタンプ文	182
	172	SE5 北	白磁	皿	—	6.2	—	中国	14C後～15C前	花唐草文(陰刻)ピロースクタイプ皿類	181
	173	SE5 北	青磁	皿	—	—	—	中国龍泉窯系	12C末～13C前	ヘラ描き 團扇	186
	174	SE5 北	青磁	皿	—	—	—	中国同安窯系	12C中～12C後	柳文	188
	175	SE5 北	陶器	甕	—	—	—	備前	15C後		243
	176	SE5 北	陶器	甕	(18, 7)	—	—	備前	13C中～14C前	口縁端部と肩部に自然蝕 沈線	242
	177	SE5 北	陶器	甕	—	—	—	常滑	13C後半	口縁部と外面肩部に自然蝕	236
	178	SE5 北	陶器	甕	—	—	—	常滑	13C代	内外面に自然蝕 №181と同一個体?	237
	179	SE5 北	陶器	甕	—	—	—	常滑	13C後	口縁部と外面肩部に自然蝕	240
	180	SE5 北	陶器	甕	—	—	—	常滑	13C代	内外面に自然蝕	241
	181	SE5 北	陶器	甕	—	—	—	常滑	13C～14C	内外面に自然蝕 №178と同一個体?	238
	182	SE5 北	瓦質	椀鉢	—	—	—	—	—		232
	183	SE5 北	瓦質	椀鉢	—	—	—	—	—		233
p. 37 第30図	184	SE5 北	瓦質	椀鉢	—	—	—	—		231	
	185	SE5 北	陶器	椀鉢	—	—	—	備前	15C後		228
	186	SE5 北	陶器	椀鉢	—	—	—	備前	15C後		230
	187	SE5 北	陶器	椀鉢	—	—	—	備前	—		29
	188	SE5 北	陶器	椀鉢	—	(18, 5)	—	備前	—		226
	189	SE5 北	陶器	椀鉢	—	(13, 6)	—	備前	—		227
	190	SE5 北	陶器	椀鉢	—	(9, 2)	—	備前	—	底面 ヘラ 起こし	28
	191	SE5 北	陶器	甕	—	—	—	備前	—		234
	192	SE5 北	瓦質	鉢	—	—	—	—	—		235
	199	SE5 南	陶器	天目碗	—	2.9	—	中国?	13C～14C		193
p. 38 第31図	200	SE5 南	青磁	坪	—	5.0	—	中国龍泉窯系	13C中～14C前	ヘラ描文 高台内面に成形時の粘土が残る	192
	201	SE5 南	青磁	碗	—	—	—	中国龍泉窯系	15C後半	スタンプ文? 打ち欠き 円盤に転用?	190
	202	SE5 南	青花	碗	—	(2, 2)	—	—	15C後～16C前	梵字文 團扇 基筋底	191
	203	SE5 南	陶器	甕	—	—	—	常滑	13C後半	口縁部と外面肩部に自然蝕	239
	204	SE5 南	陶器	椀鉢	—	—	—	備前?	13C中～14C前		229
	215	SE11	白磁	皿	—	—	—	中国	12C中		196
	216	SE11	青磁	碗	—	—	—	中国龍泉窯系	14C		197
	217	SE11	白磁	碗	—	—	—	中国	11後～12C前	玉縁	198
	218	SE11	陶器	椀鉢	—	—	—	備前?	—		200
	219	SE13	白磁	碗	—	—	—	中国	11後～12C前		204
p. 38 第31図	220	SE13	磁器	染付碗	—	—	—	中国	15C後～16C前	團扇 朝雲刻文 不明文様 基筋底	205
	221	SE22	白磁	皿	(8, 4)	(3, 6)	2.1	中国	15C	見込みに目録あり	203
p. 39 第35図	222	SE24	陶器	椀鉢	—	—	—	備前	15C後半		247
	223	SE6	磁器	染付碗	(10, 9)	(3, 8)	5.5	備前系	18C後半?	丸文 團扇	194
p. 40 第34図	224	SE6	陶器	碗	—	3.8	—	博津	18C後半?	鉄絵 見込みに重ね焼痕有り 山水文?	195
	226	SH486	陶器	天目碗	—	(3, 0)	—	瀬戸美濃	14C後～15C前		216
p. 41 第35図	227	SH799	青磁	皿	—	—	—	中国龍泉窯系	15C後～16C?	削り高台	218
	228	SH2101	青磁	皿	(13, 4)	(8, 4)	3.4	中国龍泉窯系	15C後～16C?	№228と同一個体?	219
	229	SH2281	青磁	碗	—	4.6	—	中国龍泉窯系	14C後～15C前	円盤? 高台内面に付着物	220
	230	SH590	陶器	鉢	—	—	—	備前	14C中～15C末	外面に自然蝕	227
	231	SH2121	陶器	鉢	—	(11, 8)	—	備前	14C中～15C末?		280
p. 42第36図	293	SH538	石製品	石鏡	—	—	—	—	15C代	滑石	296

注 () 以内は寸法

第6表 出土石器観察表

掲載頁 図番号	掲載番号	遺構等	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	実測 番号
p. 12第7図	3	SC52	剥片	安山岩	(1.80)	(2.70)	(0.60)	(3.0)	背面右半部欠損	164
p. 13第8図	5	SC82	石鏃	黒曜石	(1.30)	(1.10)	0.30	(0.4)	姫島産 先端及び基部欠損	165
p. 14第9図	10	SE4 北	砥石	頁岩	(5.80)	(2.30)	(1.60)	(23.2)	大半を欠損	147
p. 15第10図	37	SE12	剥片	黒曜石	1.62	2.60	0.50	1.2	姫島産	149
	38	SE12	剥片	安山岩	1.55	3.70	0.39	1.0		150
	39	SE12	剥片	尾鈴山酸性岩	3.70	4.90	1.10	19.2		151
	40	SE12	剥片	尾鈴山酸性岩	6.60	5.70	1.50	56.0		152
	41	SE12	剥片	緑色堆積岩	3.20	1.90	0.20	1.9	磨製石鏃の素材か?	153
	42	SE12	石鏃	黒曜石	1.60	1.40	0.20	0.1	姫島産	157
	43	SE12	石鏃	黒曜石	2.00	(1.70)	(0.30)	(0.5)	姫島産 脚部欠損	155
	44	SE12	石鏃	頁岩	(2.95)	(1.90)	0.25	(1.2)	脚部欠損	154
	45	SE12	石鏃	チャート	(2.00)	(1.20)	0.30	(0.6)	基部欠損 石鏃の可能性	160
	46	SE12	石鏃	安山岩	(1.50)	(1.30)	(0.30)	(0.4)	先端部、基部欠損	158
p. 16第11図	47	SE12	石鏃	安山岩	(1.45)	(1.15)	0.25	(0.1)	背面左側縁と脚部欠損	156
	48	SE12	石鏃	頁岩	(2.05)	(0.95)	(0.15)	(0.4)	右半部～基部欠損	159
	49	SE12	剥片	緑色堆積岩	5.30	1.75	0.55	5.5	磨製石鏃の素材	162
	50	SE12	剥片	頁岩	4.00	1.80	0.40	4.5	磨製石鏃の素材	161
	51	SE12	管玉	碧玉?	0.70	0.30	0.30	(0.1以下)		163
p. 18第13図	71	SH550	敲石	ホルンフェルス	7.30	4.40	2.10	106.4		169
	72	SH2250	石鏃	砂岩	8.70	5.80	2.50	195.7		172
p. 24第18図	91	SE8	火打石	チャート	2.65	2.05	1.05	5.6		148
p. 26第20図	119	SX9	火打石	チャート	1.90	2.30	1.60	8.1		174
	120	SX9	敲石	砂岩	8.70	5.00	2.60	183.6		175
p. 37第30図	196	SE5	砥石	砂岩	10.80	6.60	3.10	(275.3)	裏面欠損	176
	197	SE5 北	石鏃	砂岩	9.30	7.20	2.50	247.4		144
	198	SE5 北	敲石	砂岩	10.20	7.60	3.70	416.0		143
p. 38第31図	213	SE5 南	砥石	頁岩	(8.20)	(2.50)	(1.40)	(42.6)	上部、下部欠損	146
	214	SE5 南	剥片	黒曜石	(2.20)	(3.60)	(1.70)	(10.3)	姫島産 左半部、下部欠損	145
p. 42第36図	287	SH928	砥石	砂岩	(11.20)	(6.70)	(2.80)	(215.3)	裏面下部欠損	170
	288	SH944	砥石	天草石	7.00	3.50	2.60	101.1		171
	289	SH2256	砥石	頁岩	(5.85)	3.60	1.20	(45.2)	上部、下部欠損	173
	290	SH127	火打石	チャート	2.00	1.50	1.00	2.5		166
	291	SH410	火打石	チャート	2.10	1.10	0.90	1.8		167
	292	SH487	火打石	チャート	2.45	1.90	0.60	2.8		168
p. 43第38図	294	攪乱内	石鏃	チャート	(1.30)	(1.00)	(0.30)	(0.1)	SE4切る攪乱内 先端部と基部を僅かに 欠損	180
	295	攪乱内	剥片	黒曜石	(4.60)	(3.50)	(2.80)	(16.5)	姫島産 SE12切る攪乱内	177
	296	採集品	石鏃	頁岩	6.50	5.80	1.70	92.6		178
	297	採集品	基石	頁岩	1.10	1.15	0.30	1.2		179
	298	採集品	五輪塔	凝灰岩	34.80	34.80	26.00	(24400)	下部欠損	297

※ () は残存法量

図版 1



SA61 完堀 南東から



SA83 完堀 西から



SC42 完堀 南東から



SC51 東から



SE4 北側調査区 南から



SE4 北側調査区
遺物出土状況 南から

図版 3



SE12 土層断面① 南から



SE12 南から



SA69 東から



SC17 東から



SC26 南から



SE8 中央調査区
遺物出土状況 南から

図版 5



掘立柱建物① 東から



SC67 南から



SE 5 北側調査区 南から



SE5 北側調査区土層 南から



SE5 南側調査区 南から



北側調査区
中央部土坑群 南西から

図版 7



SH401 遺物出土状況 南東から



SX9 土層断面 南西から

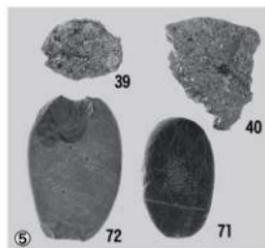
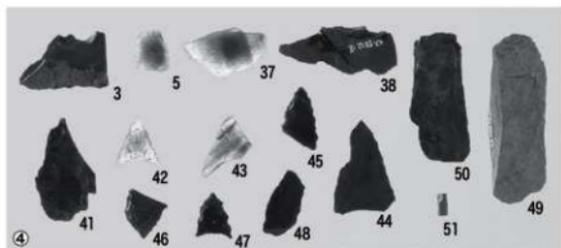
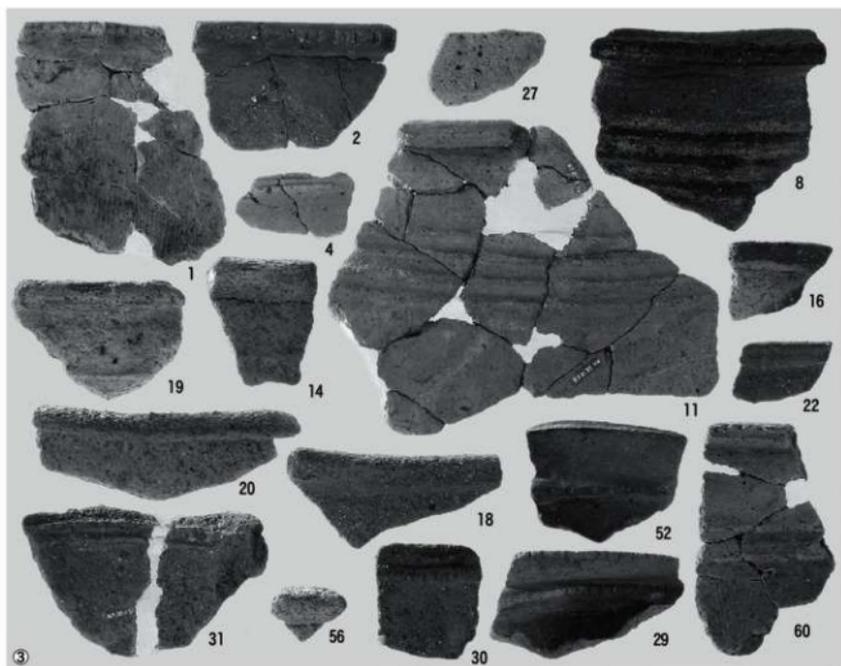


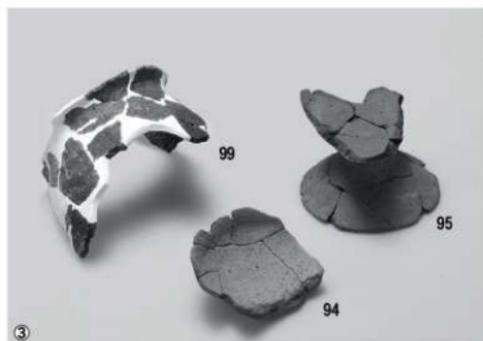
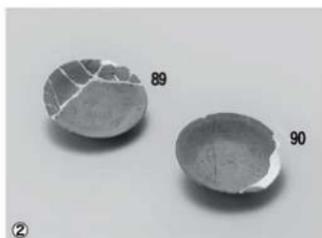
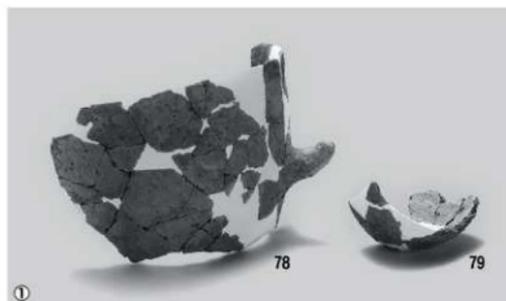
SX9 南東から



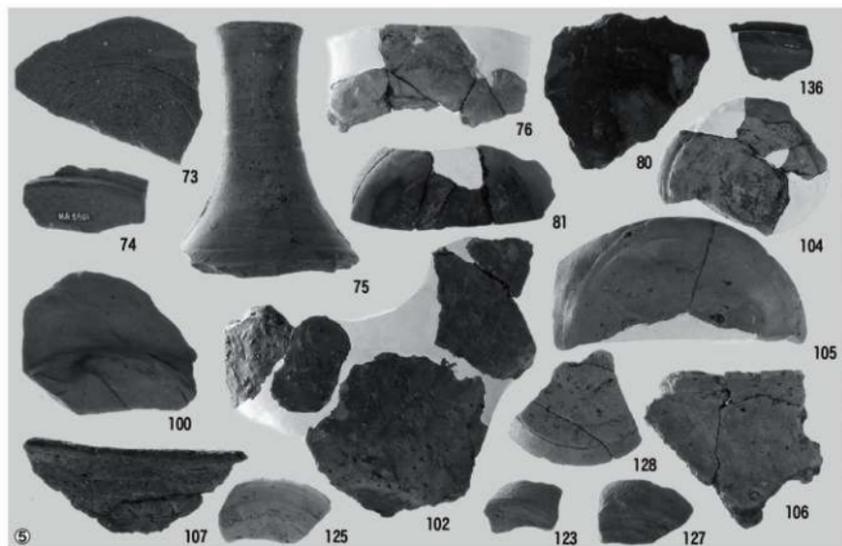
①～③：弥生時代遺構出土土器

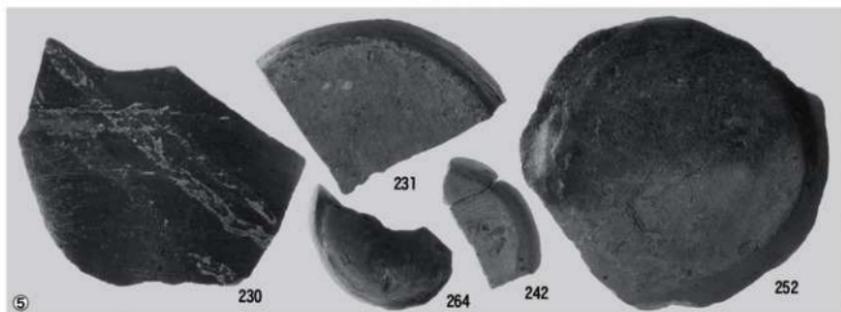
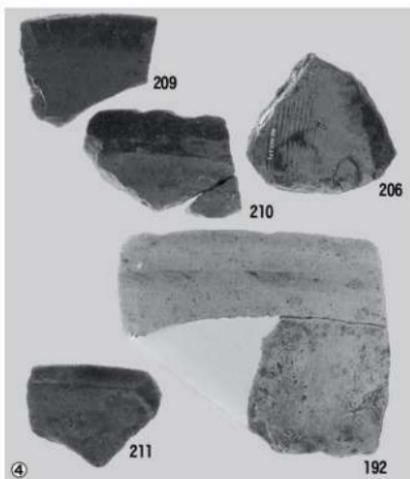
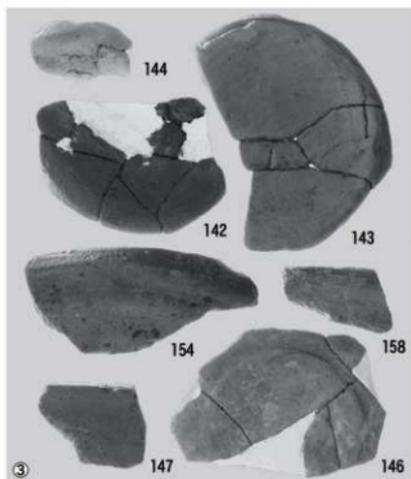
④～⑤：弥生時代遺構出土石器



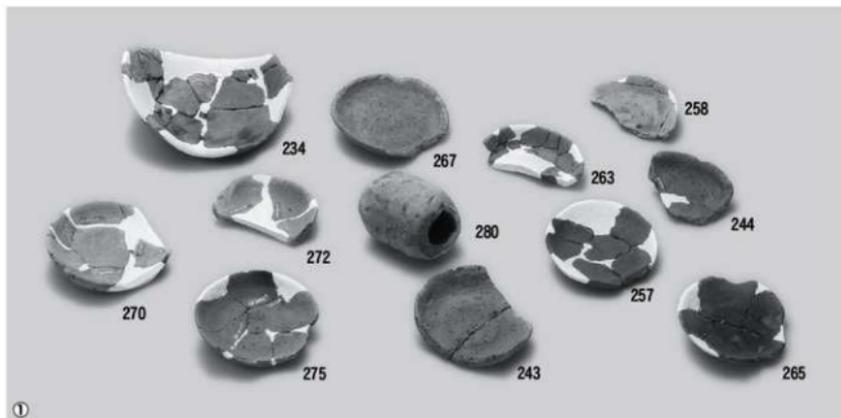


- ① : SA69 出土土器
 ② : SE8 出土土器
 ③~④ : SX9 出土土器
 ⑤ : 古墳時代~古代遺構出土石器

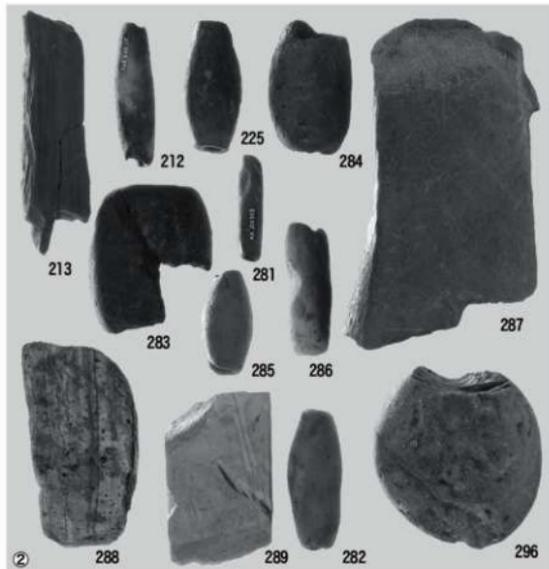




①：SX9 出土遺物 ②：古代柱穴出土土器 ③：中世掘立柱建物跡及び土坑出土土器
④：中世溝状遺構出土土器 ⑤：中世柱穴出土土器

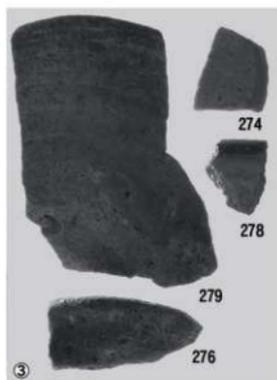


①

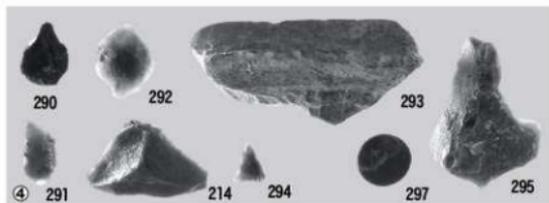


②

- ①・③：中～近世柱穴出土土器
- ②：中～近世遺構内出土及び表採土製品・石器
- ④：中～近世遺構内出土及び採集石製品・石器
- ⑤：採集五輪塔（水輪）



③



④



⑤

報告書抄録

ふりがな	かこいいせき						
書名	開遺跡						
副書名	民間開発（宅地造成工事）による埋蔵文化財調査報告書						
巻次							
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第130集						
編集者名	秋成雅博						
発行機関	宮崎市教育委員会						
所在地	〒880-2101 宮崎市大字跡江4200番3号 宮崎市生目の杜遊古館						
発行年月日	2020年3月						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査原因	種別
かこいいせき 開遺跡	みやざきけん 宮崎県 みやざきし 宮崎市 まどからちよう 佐土原町 しもなか 下那珂	45201	11 - 042	32° 0' 22" (日本測地系)	131° 28' 15" (日本測地系)	民間開発 (宅地造成工事)	集落
調査期間	調査面積	主な時代	主な遺構と遺物				
2016.10.18 ～ 2017.2.10	1483㎡	弥生	竪穴住居跡、土坑、溝状遺構、弥生土器、打製石鏃、管玉など				
		古墳	竪穴住居跡、土坑、須恵器、土師器など				
		古代	土坑、溝状遺構、須恵器、土師器など				
		中世	建物跡、土坑、溝状遺構、中国産陶磁器、国産陶器、土師器など				
		近世	溝状遺構、陶磁器など				
特記事項	弥生時代中期の管玉・打製石鏃の出土例。 土器田横穴墓群に関わる集落遺跡の可能性。 河口付近の溝に区画された中世の集落遺跡。						

宮崎市文化財調査報告書 第130集

囿遺跡

令和2年3月

宮崎市教育委員会

